

IBM® DB2 Universal Database™



DB2 クライアント機能 概説およびインストール

バージョン 8.2

IBM® DB2 Universal Database™



DB2 クライアント機能 概説およびインストール

バージョン 8.2

ご注意！

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

| | |
|-----|---|
| 原典： | GC09-4832-01 IBM® DB2 Universal Database™ Quick Beginnings for DB2 Clients Version 8.2 |
| 発行： | 日本アイ・ビー・エム株式会社 |
| 担当： | ナショナル・ランゲージ・サポート |

第1刷 2004.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1993-2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

| | |
|---------|---|
| 本書の対象読者 | v |
|---------|---|

第 1 部 DB2 クライアントのインストール

第 1 章 DB2 クライアントの概要

| | |
|---|---|
| DB2 クライアント | 3 |
| DB2 Run-Time Client Lite | 4 |
| DB2 Run-Time Client | 5 |
| DB2 Administration Client | 5 |
| DB2 Application Development Client | 6 |
| サポートされているクライアント構成とサポートされていないクライアント構成 | 6 |
| DB2 バージョン 8 クライアントを使用して DB2 UDB バージョン 7 サーバーにアクセスする | 8 |
| DB2 バージョン 8 における SNA サポートの制限 | 9 |

第 2 章 DB2 クライアントの要件

| | |
|--|----|
| ディスクおよびメモリの要件 (Windows および UNIX) | 11 |
| DB2 クライアントのインストール要件 (AIX) | 11 |
| DB2 クライアントのインストール要件 (HP-UX) | 13 |
| カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX) | 14 |
| 推奨カーネル構成パラメーター (HP-UX) | 15 |
| DB2 クライアントのインストール要件 (Linux) | 16 |
| カーネル・パラメーターの変更 (Linux) | 16 |
| DB2 クライアントのインストール要件 (Solaris オペレーティング環境) | 18 |
| カーネル・パラメーターの変更 (Solaris オペレーティング環境) | 19 |
| DB2 クライアントのインストール要件 (Windows) | 19 |
| DB2 UDB の Java SDK レベル | 21 |
| DB2 のホスト接続要件 | 22 |

第 3 章 DB2 クライアントのインストール

| | |
|-----------------------------|----|
| DB2 クライアントのインストール (Windows) | 23 |
| DB2 クライアントのインストール (UNIX) | 24 |

第 2 部 クライアント/サーバー間通信の構成

第 4 章 クライアント/サーバーのサポート

| | |
|--------------------|----|
| クライアント/サーバー通信のシナリオ | 29 |
|--------------------|----|

第 5 章 構成アシスタントを使用したクライアント/サーバー間通信の構成

| | |
|--|----|
| 構成アシスタント (CA) によるクライアント/サーバー接続の構成 | 31 |
| データベース接続の構成 | 32 |
| 構成アシスタント (CA) によるデータベース接続の 手動構成 | 32 |
| プロファイルによるデータベース接続の構成 | 34 |
| ディスクバリーによるデータベース接続の構成 | 35 |
| クライアント・プロファイル | 36 |
| クライアント・プロファイル | 36 |
| 構成アシスタントを使用したクライアント・プロ ファイルの作成およびエクスポート | 37 |
| 構成アシスタントを使用したクライアント・プロ ファイルのインポートおよび構成 | 38 |
| LDAP ディレクトリ・サポートに関する考慮事項 | 40 |
| 接続のテスト | 40 |
| 構成アシスタントを使用したデータベース接続の テスト | 40 |

第 6 章 コマンド行プロセッサを使用したクライアント/サーバー間通信の構成

| | |
|--|----|
| コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント/ サーバー接続の構成 | 43 |
| 通信パラメーター値の確認と記録 | 44 |
| クライアントからサーバーへの接続の構成のため の TCP/IP パラメーター値ワークシート | 44 |
| NetBIOS パラメーター値ワークシート | 45 |
| クライアントでの名前付きパイプ構成のための名 前付きパイプ・パラメーター値ワークシート | 46 |
| DB2 クライアントでの通信の構成 | 47 |
| TCP/IP 通信の構成 | 47 |
| NetBIOS 通信の構成 | 49 |
| サーバー・ノードのカタログ | 51 |
| DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタ ログ | 51 |
| DB2 クライアントからの NetBIOS ノードのカタ ログ | 53 |
| クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタ ログ | 54 |
| データベースのカタログ | 54 |
| CLP による DB2 クライアントからのデータベー スのカタログ | 54 |
| データベースのカタログのためのパラメーター値 ワークシート | 56 |
| CLP によるクライアント/サーバー接続のテスト | 57 |

第 3 部 DB2 シン・クライアント

第 7 章 シン・クライアントの概要

| | |
|-----------------------|----|
| シン・クライアント (Windows) | 61 |
| シン・クライアント環境 (Windows) | 61 |

| | | | |
|---|-----------|--|------------|
| シン・クライアントに関する考慮事項 (Windows) | 64 | 管理情報 | 94 |
| 第 8 章 シン・クライアントのインストー | 67 | アプリケーション開発情報 | 95 |
| ル | 67 | ビジネス・インテリジェンス情報 | 96 |
| シン・クライアント環境のセットアップ (Windows) | 67 | DB2 Connect 情報 | 96 |
| コード・サーバーでの DB2 Administration Client ま | | 入門情報 | 96 |
| たは DB2 Connect Personal Edition のインストール | | チュートリアル情報 | 97 |
| (Windows) | 68 | オプション・コンポーネント情報 | 97 |
| コード・サーバーでのクロスプラットフォーム・サ | | リリース・ノート | 98 |
| ポートのセットアップ (Windows) | 68 | PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法 | 99 |
| すべてのシン・ワークステーションに対してコー | | DB2 の印刷資料の注文方法 | 100 |
| ド・ディレクトリーを使用可能にする (Windows) | 71 | DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す | 101 |
| シン・クライアント応答ファイルの作成 (Windows) | 72 | コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを | 102 |
| シン・クライアントのネットワーク・ドライブをコ | | 呼び出す | 102 |
| ード・サーバーにマップする (Windows) | 73 | コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼 | 102 |
| thnsetup コマンドを実行してシン・クライアントを | | び出す | 102 |
| 使用可能にする (Windows) | 74 | コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼 | 103 |
| | | び出す | 103 |
| 第 4 部 付録 | 77 | DB2 チュートリアル | 103 |
| 付録 A. DB2 Universal Database の技 | | DB2 トラブルシューティング情報 | 104 |
| 術情報 | 79 | アクセス支援 | 105 |
| DB2 資料とヘルプ | 79 | キーボードによる入力およびナビゲーション | 105 |
| DB2 資料の更新 | 79 | アクセスしやすい表示 | 106 |
| DB2 インフォメーション・センター | 80 | 支援テクノロジーとの互換性 | 106 |
| DB2 インフォメーション・センターのインストー | | アクセスしやすい資料 | 106 |
| ル・シナリオ | 82 | ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム | 106 |
| DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 イ | | DB2 Universal Database 製品の共通基準認証 | 109 |
| ンフォメーション・センターのインストール (UNIX) | 84 | 付録 B. DB2 クライアントのマージ・モ | |
| DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 イ | | ジュール | 111 |
| ンフォメーション・センターのインストール | | 付録 C. DB2 Run-Time Client Lite の | |
| (Windows) | 87 | コマンド行オプション | 115 |
| DB2 インフォメーション・センターの呼び出し | 90 | 付録 D. 特記事項 | 117 |
| コンピューターまたはイントラネット・サーバーへ | | 商標 | 119 |
| の DB2 インフォメーション・センターの更新イン | | 索引 | 121 |
| ストール | 91 | IBM と連絡をとる | 125 |
| DB2 インフォメーション・センターにおける特定の | | 製品情報 | 125 |
| 言語でのトピックの表示 | 92 | | |
| DB2 PDF 資料および印刷された資料 | 93 | | |
| DB2 の基本情報 | 93 | | |

本書の対象読者

本書の対象読者は、DB2 Administration Client、DB2 Application Development Client、DB2 Run-Time Client、または DB2 Run-Time Client Lite のインストールと構成に関心のある方です。

また、シン・クライアントまたは DB2 Connect シン・クライアント環境のセットアップに関心のある方も、これらのトピックを扱っている節を参照すると役立ちます。

第 1 部 DB2 クライアントのインストール

第 1 章 DB2 クライアントの概要

DB2 クライアント

DB2[®] クライアントには以下の 4 つのタイプがあります。

- **Run-Time Client Lite。** DB2 Run-Time Client Lite は、DB2 Run-Time Client の小型のフットプリント・バージョンで、Windows[®] 上でのみ使用可能です。Windows Installer Merge Modules もこの製品に対して使用可能です。これを使用して、このクライアントの機能をユーザーの製品に組み込むことができます。
- **Run-Time Client。** このタイプの DB2 クライアントを使用して、GUI を使用しない基本的なアクセスを提供します。
- **Administration client。** このタイプの DB2 クライアントを使用して、DB2 サーバーをリモート側で管理します。また DB2 Administration Client には、DB2 Run-Time Client で使用可能な機能すべてが含まれています。
- **Application Development client。** このタイプの DB2 クライアントを使用して、ストアド・プロシージャ、ユーザー定義関数、およびクライアント・アプリケーションを含む、DB2 データベース・アプリケーションを開発します。また DB2 Application Development Client には、DB2 Run-Time Client で使用可能な機能すべてが含まれています。

DB2 クライアント上にデータベースを作成することはできません。ユーザーがアクセスできるのは、DB2 サーバー上にあるデータベースだけです。

クライアント・バックレベル・サポート:

- DB2 UDB バージョン 8 クライアントは、DB2 UDB バージョン 8 サーバーをサポートします。
- DB2 UDB バージョン 8 クライアントは、DB2 UDB バージョン 7 サーバーが DRDA[®]-AS を実行している場合にのみ、DB2 UDB バージョン 7 サーバーに接続できます。
- DB2 UDB バージョン 7 およびバージョン 6 クライアントは、DB2 UDB バージョン 8 サーバーに接続できますが、機能は限定されます。
- DB2 UDB バージョン 8 クライアントは、DB2 Connect[™] バージョン 7 サーバーに接続できません。

関連概念:

- 5 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 5 ページの『DB2 Administration Client』
- 6 ページの『DB2 Application Development Client』
- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによるインストールの基礎』
- 4 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 23 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』

- 24 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『バージョン 8 と以前のリリースとの非互換性』
- 111 ページの『付録 B. DB2 クライアントのマージ・モジュール』

DB2 Run-Time Client Lite

DB2® Run-Time Client Lite は、アプリケーションが DB2 Universal Database™ サーバーにアクセスできるようにする基本機能を提供します。また DB2 Run-Time Client Lite には、DB2 Run-Time Client と同様に、JDBC、SQLJ、ODBC、CLI、OLE DB および .NET に必要なサポートも含まれます。

DB2 Run-Time Client Lite はインストール・イメージ・サイズを小さくしているの
で、大容量配置またはユーザーのアプリケーションとのバンドルに理想的です。

インストール・プログラムは、インストールを実行する際の言語、および英語 (必須) をインストールします。DB2 Run-Time Client Lite は、すべての言語に対するサポートを提供する 1 つの言語と、言語特有のいくつかのイメージから成っています。すべてのイメージには、英語サポートが含まれます。インストールする言語 (複数可) に該当するイメージを使用しなければなりません。

制限:

- DB2 Run-Time Client Lite は、Windows® オペレーティング・システム上でのみ使用可能で、TCP/IP および名前付きパイプ通信プロトコルのみをサポートします。
- 構成アシスタントは DB2 UDB Run-Time Client Lite にパッケージされていません。使用可能な GUI は CLI/ODBC 管理 GUI だけです。
- CLI アプリケーション用の DB2 クライアントを使用する前に、有効なバインド・ファイルが置かれているシステムから CLI パッケージをバインドする必要があります。

関連概念:

- 5 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 5 ページの『DB2 Administration Client』
- 6 ページの『DB2 Application Development Client』

関連タスク:

- 23 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』

関連資料:

- 111 ページの『付録 B. DB2 クライアントのマージ・モジュール』

DB2 Run-Time Client

DB2[®] Run-Time Client は、アプリケーションが DB2 Universal Database[™] サーバーおよび DB2 Connect[™] サーバーにアクセスするのに必要な機能を提供します。機能には、通信プロトコル・サポートと、JDBC、SQLJ、ODBC、CLI、OLE DB、および .NET などのアプリケーション・インターフェースのサポートが含まれます。

制限:

- 構成アシスタントは DB2 UDB Run-Time Client にパッケージされていません。使用可能な GUI は CLI/ODBC 管理 GUI だけです。
- DB2 Run-Time Client を使用する場合は、CLI アプリケーション用の DB2 クライアントを使用する前に、有効なバインド・ファイルが置かれているシステムから CLI パッケージをバインドする必要があります。

サポートされるプラットフォーム:

DB2 Run-Time Client を使用できるプラットフォームは、AIX[®]、HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境、および Windows[®] の各オペレーティング・システムです。

関連概念:

- 3 ページの『DB2 クライアント』
- 5 ページの『DB2 Administration Client』
- 6 ページの『DB2 Application Development Client』
- 4 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 23 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』
- 24 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

DB2 Administration Client

DB2[®] Administration Client を使用すると、さまざまなプラットフォームのワークステーションから DB2 データベースへのアクセスと管理を行うことができます。DB2 Administration Client には DB2 Run-Time Client のすべての機能があり、すべての DB2 管理ツールおよびシン・クライアントのサポートが組み込まれています。

サポートされるプラットフォーム:

DB2 Administration Client を使用できるプラットフォームは、AIX[®]、HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境、および Windows[®] の各オペレーティング・システムです。

関連概念:

- 3 ページの『DB2 クライアント』
- 5 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 6 ページの『DB2 Application Development Client』

- 4 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 23 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』
- 24 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

DB2 Application Development Client

DB2[®] Application Development Client は、文字ベース、マルチメディア、およびオブジェクト指向のアプリケーションの開発用のグラフィックおよび非グラフィック・ツールとコンポーネントの集合です。特殊フィーチャーとして、サポートしているすべてのプログラム言語用のデベロップメント・センターとサンプル・アプリケーションを含んでいます。Application Development Client には、DB2 Administration Client 製品の一部として提供されるツールとコンポーネントが組み込まれています。

サポートされるプラットフォーム:

DB2 Application Development Client を使用できるプラットフォームは、AIX[®]、HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境、および Windows[®] の各オペレーティング・システムです。

関連概念:

- 3 ページの『DB2 クライアント』
- 5 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 5 ページの『DB2 Administration Client』
- 4 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 23 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』
- 24 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

サポートされているクライアント構成とサポートされていないクライアント構成

このセクションでは、クライアントおよびサーバー用の、サポートされている構成とサポートされていない構成を使用したシナリオについて説明します。

DB2 バージョン 7 クライアントから DB2 バージョン 8 サーバーへのローカル接続はサポートされていません。DB2 バージョン 7 クライアントを使用して、同一のマシン上で DB2 バージョン 8 インスタンスをローカル・ノードとしてカタログすることはできません。

次の表は、DB2 クライアント用の標準構成サポートおよびゲートウェイ構成サポートを示しています。たとえば、DB2 Universal Database バージョン 8 の 32 ビット・クライアントを使用している場合、バージョン 8 の 32 ビット・ゲートウェイを使用して DB2 Universal Database バージョン 8 の 64 ビット・サーバーに接続することができます。

次の表で、バージョン 7 クライアントに言及している箇所は、フィックスパック 7 以降のレベルであることが暗黙の合意になっています。フィックスパック 7 でない DB2 クライアントはサポートされていません。

表 1. DB2 バージョン 7 およびバージョン 8 のクライアント/サーバー・マトリックス

| DB2 クライアント | バージョン 7 の 32 ビット・サーバー UNIX [®] 、Windows [®] 、 Linux | バージョン 7 の 64 ビット・サーバー UNIX | バージョン 8 の 32 ビット・サーバー UNIX、Windows、 Linux | バージョン 8 の 64 ビット・サーバー UNIX、Windows、 Linux |
|---|--|----------------------------------|--|--|
| バージョン 7 (32 ビット) | あり | なし | あり (6) | あり (2,5,8) |
| バージョン 7 (64 ビット) | なし | あり | なし | あり (4,5) |
| バージョン 8 (32 ビット) | あり (1,7) | なし | あり | あり |
| バージョン 8 (64 ビット) | なし | あり (1,7) | あり | あり |
| AS/400 [™] 、iSeries [™] 、 OS/390、zSeries [™] 、 VSE、VM クライアント | あり | あり | あり (3) | あり (3) |

注:

1. DB2 Universal Database バージョン 7 サーバーは、DRDA アプリケーション・サーバー (AS) として構成される必要があります。バージョン 8 の 32 ビット・クライアントとバージョン 7 の 32 ビット・サーバーを併用している場合、またはバージョン 8 の 64 ビット・クライアントとバージョン 7 の 64 ビット・サーバーを併用する場合に、この必要があります。
2. DB2 バージョン 7 の 32 ビット Windows クライアントから DB2 バージョン 8 の 64 ビット Windows サーバーへの直接サポート (DB2 Connect[™] ゲートウェイが介在しない) があります。しかし、他のプラットフォームでは、DB2 バージョン 7 の 32 ビット・クライアントからの直接サポートはありません。
3. TCP/IP のみサポートされます。SNA はサポートされていません。このサポートは、バージョン 8 サーバーと併用している AS/400、iSeries、OS/390、zSeries、VSE、および VM クライアントから利用できます。
4. Windows 以外のオペレーティング・システムでは、バージョン 7 の 64 ビット・クライアントは、DB2 Universal Database バージョン 8 の 64 ビット・サーバーのみサポートしています。
5. バージョン 7 クライアントは、バージョン 8 の 64 ビット・サーバー上の SQL 要求のみサポートしています。ユーティリティまたは API 要求についてはサポートされていません。
6. バージョン 7 の 32 ビット・クライアントとバージョン 8 の 32 ビット・サーバーを併用している場合、**AT NODE** 機能を使用している DB2 Universal Database ユーティリティはサポートされていません。この機能は、基本的にパーティション・データベース環境を管理するために使用されます。
7. バージョン 8 の 32 ビット・クライアントとバージョン 7 の 32 ビット・サーバーを併用している場合、またはバージョン 8 の 64 ビット・クライアントと

バージョン 7 の 64 ビット・サーバーを併用する場合には、DB2 Universal Database バージョン 7 サーバーはフィックスパック 8 以降のレベルでなければなりません。**db2updv7** ユーティリティは、DB2 Universal Database バージョン 8 クライアントからアクセス可能にするためにサーバー上で実行する必要があります。いったんこのユーティリティがデータベース上で実行されると、このデータベースは、以前のフィックスパック・レベルのインスタンスでは使用できません。

- バージョン 7 の 32 ビット・クライアントとバージョン 8 の 64 ビット・サーバーを併用している場合、DB2 Connect バージョン 8 の 32 ビット中間ゲートウェイを使用する場合のみ、UNIX 上で DB2 Universal Database バージョン 8 の 64 ビット・サーバーに接続できます。

関連概念:

- 3 ページの『DB2 クライアント』

関連資料:

- 29 ページの『クライアント/サーバー通信のシナリオ』
- 「管理ガイド: プランニング」の『バージョン 8 と以前のリリースとの非互換性』

DB2 バージョン 8 クライアントを使用して DB2 UDB バージョン 7 サーバーにアクセスする

DB2 Universal Database バージョン 8 クライアントから DB2 Connect バージョン 7 サーバーにアクセスすることはできません。

DB2 バージョン 8 クライアントから Linux、UNIX、または Windows オペレーティング・システム上の DB2 Universal Database バージョン 7 サーバーにアクセスするには、以下のことを行う必要があります。

- サーバーに DB2 バージョン 7 フィックスパック 8 以降をインストールします。
- **db2updv7** コマンドを実行します。

DB2 バージョン 7 フィックスパックのインストール方法については、DB2 バージョン 7 フィックスパックの **Readme** およびリリース情報を参照してください。

関連概念:

- 3 ページの『DB2 クライアント』

関連資料:

- 6 ページの『サポートされているクライアント構成とサポートされていないクライアント構成』

DB2 バージョン 8 における SNA サポートの制限

以下のサポートは、DB2[®] Universal Database バージョン 8 Enterprise Server Edition (ESE) for Windows[®] および UNIX[®] ベース・オペレーティング・システム、DB2 Connect[™] バージョン 8 Enterprise Edition (EE) for Windows および UNIX ベース・オペレーティング・システムからは削除されました。

- SNA を使用したマルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) 機能は使用できません。マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) を必要とするアプリケーションは、TCP/IP 接続を使用しなければなりません。TCP/IP を使用した、ホストまたは iSeries[™] データベース・サーバーへのマルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) は、いくつかのリリースで使用可能になっています。マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) サポートを必要とするホストまたは iSeries アプリケーションは、DB2 ESE バージョン 8 に付属する新機能の TCP/IP マルチサイト更新 (2 フェーズ・コミット) サポートを使用することができます。
- DB2 UDB ESE または DB2 Connect EE サーバーは、SNA を使用したクライアント接続を受け入れなくなりました。DB2 バージョン 8 フィックスパック 1 を使用すると、32 ビット・バージョンの AIX[®]、Solaris オペレーティング環境、HP-UX、および Windows ベースのアプリケーションが SNA を使用してホストまたは iSeries ベースのデータベース・サーバーにアクセスできるようになります。このサポートにより、アプリケーションは SNA を使用してホスト・データベースにアクセスできますが、1 フェーズ・コミットに限定されます。
- DB2 for z/OS[™] での Sysplex サポートは TCP/IP を使用してのみ利用可能です。Sysplex サポートは SNA 接続を使用しては提供されません。
- パスワード変更サポートは、ホスト・データベース・サーバーへの SNA 接続を使用しては利用できなくなりました。
- DB2 および DB2 Connect の次のバージョンでは、すべての SNA サポートがなくなります。

関連概念:

- 「DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」の『DB2 Connect』

関連資料:

- 「DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」の『DB2 Connect の製品オフライン』
- 「DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」の『ホスト・データベース』
- 「DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」の『DB2 Connect のホストおよび iSeries サポート』

第 2 章 DB2 クライアントの要件

ディスクおよびメモリの要件 (Windows および UNIX)

ディスク要件:

この製品に必要なディスク・スペースは、選択するインストールのタイプ、およびご使用のファイル・システムのタイプに応じて異なります。DB2 セットアップ・ウィザードは、標準、コンパクト、またはカスタム・インストールの際に選択したコンポーネントに基づいて、動的なサイズの見積もりを行います。

Windows の場合、FAT (File Allocation Table) ドライブでは、クラスター・サイズが大きいため、NTFS (New Technology File System) ドライブよりもかなり大きなスペースが必要になります。

必須のソフトウェア、通信製品、およびドキュメンテーションのために必要なディスク・スペースの余裕をとるよう気をつけてください。

メモリー要件:

DB2 UDB は 256 MB 以上の RAM を必要とします。GUI ツールを使用する場合、512MB の RAM が推奨されます。メモリー要件を判断するときは、以下の点に注意してください。

- DB2 クライアント・サポートについては、これらのメモリー要件は 5 つの並行クライアント接続を基本としています。5 クライアント接続ごとに、さらに 16 MB の RAM が必要です。
- システム上で実行される他のソフトウェアのために、追加のメモリーが必要です。
- DB2 GUI ツールのパフォーマンスを高めるために、追加のメモリーが必要になる場合があります。
- パフォーマンス上の個々の要件によって、必要なメモリー量は異なります。
- メモリー要件は、データベース・システムのサイズおよび複雑さによって変化します。
- メモリー要件は、データベース・アクティビティーの増加、およびシステムにアクセスするクライアントの数によって変化します。
- Linux では、最低でも RAM の 2 倍の SWAP スペースが推奨されています (要求されているわけではありません)。

DB2 クライアントのインストール要件 (AIX)

以下に、AIX 上の DB2 クライアントのための、ハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信要件を示します。

ハードウェア要件

RISC System/6000

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

以下のいずれかになります。

バージョン 4.3.3 (32 ビット)

- 保守レベル 11

バージョン 5.1.0 (32 ビットまたは 64 ビット)

- 保守レベル 5 および推奨保守パッケージ AIX 5100-04 および APAR IY46667

バージョン 5.2.0 (32 ビットまたは 64 ビット)

保守レベル 2、および

並行 I/O (CIO) および直接 I/O (DIO) マウント・ボリュームの場合：
APAR IY49129 および IY49346

JFS ファイルシステムの場合：

APAR IY48339

JFS2 ファイルシステムの場合：

APAR IY49304

Java の場合：

推奨保守パッケージ AIX 5200-01 および APAR IY46668

1000 を超える **db2agent** を実行し、**32 ビット AIX** カーネルを使用する場合：

APAR IY49885、および db2start の前または AIX ブート時に "vmo -o pta_balance_threshold=0" を指定する

次の AIX ファイル・セットは、英語以外の言語で DB2 UDB をインストールまたは実行するのに必要です。

- X11.fnt.ucs.ttf (AIX Windows Unicode TrueType フォント)
- X11.fnt.ucs.com (AIX Windows 共通フォント)
- x1C.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x
- アジア諸国の言語の場合、次のファイル・セットも必要です。
 - X11.fnt.ucs.ttf_CN (zh_CN または Zh_CN 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_KR (ko_KR 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_TW (zh_TW または Zh_TW 用)
- AIX バージョン 4.3.3 では、次のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix43.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x
- AIX バージョン 5.x では、次のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix50.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x

AIX ファイル・セットは、

<http://techsupport.services.ibm.com/server/fixes> からダウンロードできます。

ソフトウェア要件

- Kerberos サポートの場合、IBM Network Authentication Service クライアント v1.3 (またはそれ以降) を、AIX V5.2 (またはそれ以降) 上で実行していることが必要です。
- LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サポートを使用するには、IBM SecureWay Directory Client V3.2.1 またはそれ以降が必要で
- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。

通信要件

- TCP/IP が必要です。インストール時に選択していれば、AIX 基本オペレーティング・システムは TCP/IP 接続を提供します。

関連資料:

- 21 ページの『DB2 UDB の Java SDK レベル』

DB2 クライアントのインストール要件 (HP-UX)

以下に、HP-UX 上の DB2 クライアントのための、ハードウェア要件、オペレーティング・システム要件、ソフトウェア要件、および通信要件を示します。

制約事項:

カーネル構成パラメーターを更新する場合には、システム再始動が必要です。カーネル構成パラメーターは /etc/system に設定されます。これらのパラメーターは、DB2 クライアントをインストールする前に設定しなければなりません。

ハードウェア要件

- HP 9000 シリーズ 700 または 800 システム
- HP Intel Itanium 2 プロセッサ

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

- 以下をインストール済みの PA-RISC 2.x (PA-8x00) プロセッサを持つシステム用の HP-UX 11i (11.11)
 - 2003 年 6 月 GOLDBASE11i バンドル
 - 2003 年 6 月 GOLDAPPS11i バンドル
 - パッチ PHSS_26560、PHKL_28489、PHCO_27434、および PHCO_29960
 - Java SDK 1.3.1 および 1.4 用パッチ。必要なパッチについては、<http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html> を参照してください。

DB2 クライアントは、パッチ PHKL_30065 を適用した Itanium ベースのシステム用の HP-UX バージョン 11i v2 (B.11.23) 上で実行できます。

ソフトウェア要件

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。
- Application Development Client をインストールする場合、SQL ストアード・プロシージャをビルドするために C コンパイラが必要です。

通信要件

- TCP/IP は HP-UX 基本オペレーティング・システムで提供されます。

関連資料:

- 21 ページの『DB2 UDB の Java SDK レベル』

カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX)

DB2 (HP-UX 版) 製品をインストールする前に、ご使用のシステムのカーネル構成パラメーターの更新が必要となる可能性があります。カーネル構成パラメーターを更新した後、コンピューターを再始動する必要があります。

前提条件:

カーネル・パラメーターを変更するには、root 権限が必要です。

手順:

次のようにして、カーネル・パラメーターを変更します。

1. **sam** コマンドを入力して、System Administration Manager (SAM) プログラムを開始します。
2. 「**カーネルの構成 (Kernel Configuration)**」アイコンをダブルクリックします。
3. 「**構成可能なパラメーター (Configurable Parameters)**」アイコンをダブルクリックします。
4. 変更したいパラメーターをダブルクリックして、「**公式/値 (Formula/Value)**」フィールドに新しい値を入力します。
5. 「**OK**」をクリックします。
6. 変更したいすべてのカーネル構成パラメーターについて、これらのステップを繰り返します。
7. すべてのカーネル構成パラメーターを設定し終わったら、アクション・メニュー・バーから「**アクション**」->「**新規カーネルの処理 (Process New Kernel)**」を選択します。

カーネル構成パラメーターの値を変更した後に、HP-UX オペレーティング・システムは自動的に再始動されます。

関連資料:

- 「**コマンド・リファレンス**」の『db2osconf - カーネル・パラメーター値のためのユーティリティー・コマンド』

推奨カーネル構成パラメーター (HP-UX)

HP-UX システムで DB2 UDB 64 ビットを実行している場合には、 **db2osconf** コマンドを実行して、ご使用のシステムにとって適切なカーネル構成パラメーター値を提示してください。

HP-UX システムで DB2 UDB 32 ビットを実行している場合には、次の表に適切なカーネル構成パラメーター値が推奨されています。

表 2. カーネル構成パラメーターの推奨値 (HP-UX)

| カーネル・パラメーター | 物理メモリー: 64MB から 128MB | 物理メモリー: 128MB から 256MB | 物理メモリー: 256MB から 512MB | 物理メモリー: 512MB 超 |
|-------------|-----------------------------|------------------------------|------------------------------|--------------------|
| maxuprc | 256 | 384 | 512 | 1500 |
| maxfiles | 256 | 256 | 256 | 256 |
| nproc | 512 | 768 | 1024 | 2048 |
| nflocks | 2048 | 4096 | 8192 | 8192 |
| ninode | 512 | 1024 | 2048 | 2048 |
| nfile | (4 * ninode) | (4 * ninode) | (4 * ninode) | (4 * ninode) |
| msgseg | 8192 | 16384 | 32767 (1) | 32767 (1) |
| msgmb | 65535 | 65535 | 65535 | 65535 |
| msgmax | 65535 | 65535 | 65535 | 65535 |
| msgtql | 256 | 512 | 1024 | 2048 |
| msgmap | 130 | 258 | 258 | 2050 |
| msgmni | 128 | 256 | 256 | 1024 |
| msgssz | 16 | 16 | 16 | 16 |
| semnmi | 128 | 256 | 512 | 2048 |
| semmap | 130 | 258 | 514 | 2050 |
| semnms | 256 | 512 | 1024 | 4096 |
| semnmu | 256 | 512 | 1024 | 1024 |
| shmmax | 67 108 864 | 134 217 728 (3) | 268 435 456 (3) | 268 435 456 (3) |
| shmmni | 300 | 300 | 300 | 1 000 |

注:

1. msgseg パラメーターは 32 767 以下でなければなりません。
2. msgmax パラメーターは 65 535 に設定しなければなりません。
3. shmmax パラメーターは、134 217 728 または物理メモリーの 90% (バイト単位) のうち大きい値に設定する必要があります。例えば、システム中の物理メモリーが 196 MB の場合は、shmmax を 184 968 806 (196*1024*1024*0.9) に設定してください。

関連タスク:

DB2 クライアントのインストール要件 (Linux)

以下に、Linux 上の DB2 クライアントのための、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信要件を示します。

カーネル構成パラメーターの更新が必要となることがあります。カーネル構成パラメーターは /etc/sysctl.conf に設定されます。sysctl コマンドを使用したこれらのパラメーターの設定および活動化については、ご使用のオペレーティング・システムの資料を参照してください。

オペレーティング・システム要件

サポート・レベルの Linux に関する最新の技術情報を調べるには、ブラウザーで <http://www.ibm.com/db2/linux/validate> を参照してください。

DB2 Connect Enterprise Edition は現在、Linux zSeries 64 ビット上でサポートされます。

DB2 for Linux zSeries 31 ビットは Linux zSeries 64 ビット・オペレーティング・システム上ではサポートされません。Linux zSeries 64 ビット OS 上では「64 ビット DB2 for Linux zSeries 64 ビット OS」イメージを、Linux zSeries 31 ビット・オペレーティング・システム上では「31 ビット DB2 for Linux zSeries 31 ビット OS」イメージを使用しなければなりません。

ソフトウェア要件

DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。

Kerberos 認証を使用する場合には、以下のファイルセットを使用する、Red Hat Enterprise Linux Advanced Server 2.1 (32 ビット Intel のみ) が必要です。

- krb5-libs
- krb5-workstation

通信要件

- TCP/IP。インストール時に選択していれば、Linux 基本オペレーティング・システムは TCP/IP 接続を提供します。

関連資料:

- 21 ページの『DB2 UDB の Java SDK レベル』

カーネル・パラメーターの変更 (Linux)

DB2 UDB をインストールする前に、Linux カーネル・パラメーターを更新することができます。DB2 UDB は必要であれば、自動的に IPC 限界を引き上げます。それでもなお、ユーザーの特定の必要に応じて、これらの限界をさらに引き上げることができます。

前提条件:

カーネル・パラメーターを変更するには、root 権限が必要です。

手順:

次のようにして、カーネル・パラメーターを更新します。

RedHat および SuSE

2.4.x シリーズのカーネルを使用しているシステムでは、メッセージ・キュー・パラメーターのデフォルト値 (msgmni) があります。これは、同時にわずかな数だけの DB2 への接続が許可される値です。DB2 を正常に実行するためには、セマフォ配列パラメーターも変更する必要があります。

ipcs -l コマンドを発行して、共用メモリー・セグメント、セマフォ配列、およびメッセージ・キューの限界をチェックします。

ipcs -l コマンドの出力は次のようになります。

```
# ipcs -l

----- Shared Memory Limits -----
max number of segments = 4096           // SHMMNI
max seg size (kbytes) = 32768
max total shared memory (kbytes) = 8388608
min seg size (bytes) = 1

----- Semaphore Limits -----
max number of arrays = 1024             // SEMMNI
max semaphores per array = 250
max semaphores system wide = 256000
max ops per semop call = 32
semaphore max value = 32767

----- Messages: Limits -----
max queues system wide = 1024          // MSGMNI
max size of message (bytes) = 65536
default max size of queue (bytes) = 16384 // MSGMAX
```

デフォルトのシステム制御構成ファイル /etc/sysctl.conf に次の項目を追加することによって、カーネル・パラメーターを変更してください。

```
kernel.msgmni = 1024
kernel.sem = 250 256000 32 1024
```

ここで、

```
max semaphores system wide =
max number of arrays x max semaphores/array
```

sysctl を -p パラメーターを指定して実行し、デフォルトのファイル /etc/sysctl.conf から sysctl 設定にロードします。

```
sysctl -p
```

ネットワーク初期設定スクリプトでの始動中に、sysctl.conf ファイルから項目が読み取られます。

配布によっては、システム初期設定ファイルの 1 つ (たとえば rc.local) に sysctl -p を追加して、リブートされるたびにカーネル・パラメーターが設定されるようにしなければならないことがあります。

DB2 クライアントのインストール要件 (Solaris オペレーティング環境)

以下に、Solaris オペレーティング環境上の DB2 クライアントのための、ハードウェア要件、オペレーティング・システム要件、ソフトウェア要件、および通信要件を示します。

制約事項:

カーネル構成パラメーターを更新する場合には、システム再始動が必要です。カーネル構成パラメーターは /etc/system に設定されますが、DB2 クライアントを使用するために修正が必要な場合は、/etc/system に加えた変更を有効にするためにリブートが必要です。これらのパラメーターは、DB2 クライアントをインストールする前に設定しなければなりません。

ハードウェア要件

Solaris SPARC ベース・コンピューター

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

- Solaris のバージョン 7 以降
- Solaris オペレーティング環境のバージョン 7 には、以下のパッチが必要です。
 - Solaris 7 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106327-10
 - Solaris 7 (64 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106300-11 + 106327-10
 - Solaris 8 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108434-03 および 108528-12
 - Solaris 8 (64 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108435-03 + 108434-03 および 108528-12
 - Solaris 9 (32 ビット)
 - Solaris 9 (64 ビット)

「推奨 & セキュリティー・パッチ」は、<http://sunsolve.sun.com> Web サイトから入手できます。SunSolve Online Web サイトで、左側のパネルで「パッチ」メニュー項目をクリックします。

さらに J2SE Solaris オペレーティング環境 Patch Cluster も必要です。

次のソフトウェアは Solaris オペレーティング環境に DB2 クライアントをインストールするために必要です。

- SUNWlibC

ソフトウェア要件

- Kerberos サポートの場合、SEAM v1.0.1 を使用した Solaris オペレーティング環境 8 またはそれ以上が必要です。SEAM v1.0.1 は、Solaris オペレーティング環境 8 Admin Pack に組み込まれています。

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。
- Application Development Client をインストールする場合、SQL ストアード・プロシージャをビルドするために C コンパイラーが必要です。

通信要件

- TCP/IP が必要です。Solaris オペレーティング・システム環境は TCP/IP 接続を備えています。

関連資料:

- 21 ページの『DB2 UDB の Java SDK レベル』

カーネル・パラメーターの変更 (Solaris オペレーティング環境)

DB2 UDB をインストールする前に、システムのカーネル構成パラメーターを更新することをお勧めします。

推奨カーネル・パラメーターを提示するには、**db2osconf** コマンドを使用してください。

カーネル・パラメーターに変更を加えた後、システムを再始動する必要があります。

前提条件:

カーネル・パラメーターを変更するには、root 権限が必要です。

手順:

カーネル・パラメーターを設定するには、次のように `/etc/system` ファイルの末尾に行を追加します。

```
set parameter_name = value
```

例えば、`msgsys:msginfo_msgmax` パラメーターの値を設定するには、`/etc/system` ファイルの末尾に次の行を追加します。

```
set msgsys:msginfo_msgmax = 65535
```

`/etc/system` ファイルの更新後に、システムを再始動します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2osconf - カーネル・パラメーター値のためのユーティリティー・コマンド』

DB2 クライアントのインストール要件 (Windows)

以下に、Windows 上の DB2 クライアントのための、オペレーティング・システム要件、ソフトウェア要件、および通信要件を示します。

オペレーティング・システム要件

以下のうちの 1 つです。

- Windows 98
- Windows ME
- Windows NT バージョン 4.0 (Service Pack 6a 以降)
- Windows NT Server 4.0, Terminal Server Edition (Terminal Server 用 Service Pack 6 以降)。これは DB2 Run-Time Client だけをサポートしません。
- Windows 2000
- Windows XP (32 ビット版と 64 ビット版)
- Windows Server 2003 (32 ビットおよび 64 ビット・エディション)

ソフトウェア要件

最新のオペレーティング・システム情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。
- LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) を使用したい場合、Microsoft LDAP クライアントまたは IBM SecureWay LDAP クライアント V3.2.1 以降 のいずれかが必要になります。インストールの前に、db2schex ユーティリティーを使用して、ディレクトリー・スキーマを拡張する必要があります。このユーティリティーは、インストール・メディア上にあります。
 Microsoft LDAP クライアントは、Windows ME、Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003 の各オペレーティング・システムに組み込まれています。
- データベースのバックアップと回復に Tivoli Storage Manager 機能を使用する場合は、Tivoli Storage Manager Client のバージョン 4.2.0 以降が必要です。
 - 64 ビット NT Windows システムでは、TSM クライアント API バージョン 5.1 が必須です。
- ご使用のオペレーティング・システムに IBM Antivirus プログラムがインストールされている場合には、これをオフにするかアンインストールしなければ DB2 インストールを完了することはできません。
- Application Development Client をインストールする場合、SQL ストアード・プロシージャをビルドするために C コンパイラーが必要です。

通信要件

- 名前付きパイプ、または TCP/IP
- Windows 基本オペレーティング・システムは、名前付きパイプおよび TCP/IP 接続を備えています。

注: DB2 UDB バージョン 8 では、リモート・データベースを管理する目的では TCP/IP のみがサポートされています。

関連資料:

- 21 ページの『DB2 UDB の Java SDK レベル』

DB2 UDB の Java SDK レベル

コントロール・センターのような Java ベースのツールを実行したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、下記の該当するレベルの SDK が必要になります。

インストールしようとしているコンポーネントの一部で SDK が必要な場合に、SDK がまだインストールされていないければ、DB2 セットアップ・ウィザードか応答ファイルを使用して製品をインストールする際に SDK がインストールされます。

DB2 Run-Time Client のインストール時には SDK はインストールされません。

最新の SDK に関する情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> の DB2 UDB システム要件に関する Web ページを参照してください。

最新の Linux SDK に関する情報については、
<http://www-106.ibm.com/developerworks/java/jdk/linux/tested.html> の IBM developer kit for Linux に関する Web ページを参照してください。

次の表には、オペレーティング・システムに応じた DB2 の SDK レベルがリストされています。

| オペレーティング・システム | | SDK のレベル |
|--------------------------------|--------|---|
| Windows | 32 ビット | SDK 1.4.1 Service Release 1 |
| | 64 ビット | SDK 1.4.1 Service Release 1 |
| AIX 4.3.3 | 32 ビット | SDK 1.3.1 |
| AIX 5 | 32 ビット | SDK 1.4.1 Service Release 1 |
| | 64 ビット | SDK 1.4.1 Service Release 1 |
| Solaris オペレーティング環境 (ハイブリッド) | 32 ビット | SDK 1.4.2 |
| | 64 ビット | SDK 1.4.2 |
| HP-UX RISC (ハイブリッド) | 32 ビット | SDK 1.4.2.01 |
| | 64 ビット | SDK 1.4.2.01 |
| HP-UX Itanium (ハイブリッド) | 32 ビット | SDK 1.4.2.01 |
| | 64 ビット | SDK 1.4.2.01 |
| LinuxIA | 32 ビット | SDK 1.4.1 Service Release 2 |
| | 64 ビット | 詳しくは DB2 UDB システム要件の Web ページを参照。 |
| Linux390 | 31 ビット | SDK 1.4.1 Service Release 2 |
| | 64 ビット | SDK 1.4.1 Service Release 2 |
| LinuxAMD (ハイブリッド) | 32 ビット | SDK 1.4.1 Service Release 2 |
| | 64 ビット | SDK 1.4.1 Service Release 2 (32 ビット・バージョン) |
| LinuxPPC (ハイブリッド) | 32 ビット | SDK 1.4.1 Service Release 2 |
| | 64 ビット | SDK 1.4.1 Service Release 2 |

関連概念:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX)』

DB2 のホスト接続要件

ホスト・データベース (DB2 for z/VM および VM/VSE、DB2 for eServer、iSeries、および AS/400、および DB2 for z/OS および OS/390) に接続する DB2 バージョン 8 クライアント・アプリケーションを使用する場合、DB2 PTF/APAR のセットがターゲット・サーバーに適用されていることが必要です。

- DB2 for z/VM and VM/VSE に接続する DB2 バージョン 8 クライアントを使用する場合、DB2 for VM/VSE サポートに連絡して、ターゲット・データベースに適用する必要があるパッチを入手します。
- DB2 for z/OS and OS/390 に接続する DB2 バージョン 8 クライアントを使用する場合、APAR PQ62695 のパッチをインストールしなければなりません。
- これらの関数を呼び出し、かつ DB2 for eServer iSeries and AS/400 に接続する DB2 バージョン 8 クライアントを使用するには、次のパッチをインストールしなければなりません。

| APAR | PTF |
|---------------|---------|
| V5R1: 5722SS1 | SI05363 |

パッチおよびその補足情報は、<http://techsupport.services.ibm.com/server/support> で入手できます。

関連タスク:

- 23 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』
- 24 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

第 3 章 DB2 クライアントのインストール

DB2 クライアントのインストール (Windows)

このタスクは Windows オペレーティング・システムでの DB2 クライアントのインストール方法を示します。

前提条件:

DB2 クライアントをインストールする前に、下記のことを確認してください。

- ご使用のシステムが、必要なメモリー、ディスク・スペース、およびインストール要件をすべて満たしている。
- インストールを実行できるユーザー・アカウントがある。

Windows 98、Windows ME

任意の有効な Windows 98 または Windows ME ユーザー・アカウント

Windows Terminal Server、Windows NT、Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003

Users グループなど、Guests グループよりも強い権限を持つグループに属するユーザー・アカウント。

Users グループのユーザーとして、Windows 2000 サーバーと Windows Server 2003 へのインストールを行うには、Users が HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software レジストリー・ブランチに書き込みアクセスができるようにレジストリー許可を変更しなければなりません。デフォルトの Windows 2000 および Windows Server 2003 環境では、Users グループのメンバーは HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software レジストリー・ブランチに対して読み取りアクセス権しか持っていません。

制約事項:

DB2 UDB バージョン 8 では、リモート・データベースを管理する目的では TCP/IP のみがサポートされています。

手順:

DB2 クライアントをインストールするには、以下のタスクを実行します。

1. インストールを実行するために使用するユーザー・アカウントで、システムにログオンします。
2. 他のすべてのプログラムをシャットダウンし、DB2 セットアップ・ウィザードが必要に応じてファイルを更新できるようにします。
3. 適切な CD-ROM をドライブに挿入します。自動実行機能によって DB2 セットアップ・ウィザードが起動します。DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを開始します。

手動で DB2 セットアップ・ウィザードを呼び出し、言語コードを指定することにより、デフォルトのシステム言語以外の言語で DB2 セットアップ・ウィザード

ドを実行することもできます。たとえば、**setup -i fr** は、DB2 セットアップ・ウィザードをフランス語で実行します。この例は、DB2 UDB Run-Time Client Lite には適用されません。

- Administration または Application Development クライアントをインストールする場合には、DB2 ランチパッドをオープンして、「製品のインストール (Install Products)」を選択します。
- DB2 セットアップ・ウィザードのプロンプトに従って進んでください。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。

DB2 クライアントをインストールした後は、リモート DB2 サーバーにアクセスするようにクライアントを構成してください。

ご使用の DB2 製品が、ローカル・コンピューターまたはネットワーク内の別のコンピューター上にある DB2 資料にアクセスするようにしたい場合には、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければなりません。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database および DB2 関連製品に関する資料が含まれています。DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows) を参照してください。

関連概念:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによるインストールの基礎』
- 80 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 87 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』
- 「インストールおよび構成 補足」の『サーバー・データベースへのリモート・アクセスの構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『単一パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストール (Windows)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『言語 ID (別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行する場合)』
- 「コマンド・リファレンス」の『setup - Install DB2 コマンド』
- 115 ページの『付録 C. DB2 Run-Time Client Lite のコマンド行オプション』

DB2 クライアントのインストール (UNIX)

この作業は UNIX での DB2 クライアントのインストールのステップです。

前提条件:

UNIX での DB2 クライアントのインストールを始める前に以下を行ってください。

- ご使用のシステムが、DB2 製品をインストールするのに必要なメモリー、ハードウェア、およびソフトウェア要件を満たしていることを確認してください。
- Solaris オペレーティング環境、または HP-UX 上に DB2 クライアントをインストールする場合、カーネル構成パラメーターを更新してシステムを再始動することが必要です。

制約事項:

DB2 UDB バージョン 8 では、リモート・データベースを管理する目的では TCP/IP のみがサポートされています。

手順:

カーネル構成パラメーターを更新してからシステムを開始 (Solaris オペレーティング環境および HP-UX では必須、Linux では推奨) した後に、DB2 クライアントをインストールできます。

UNIX 上に DB2 クライアントをインストールするには、以下のようにします。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。
3. **cd *Icdrom*** コマンドを入力して CD-ROM がマウントされているディレクトリーに移動します。ここで、*Icdrom* は CD-ROM のマウント・ポイントです。
4. **./db2setup** コマンドを入力します。「DB2 セットアップ」ウィザードが開始します。
5. DB2 ランチパッドがオープンしたら、「製品のインストール (Install Products)」を選択してください。
6. インストールしたいクライアントを選択します。
7. DB2 セットアップ・ウィザードのプロンプトに従って進んでください。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。

インストールが完了すると、DB2 クライアントは *DB2DIR* ディレクトリーにインストールされます。 *DB2DIR* は以下のとおりです。

AIX /usr/opt/db2_08_01

Linux およびその他の UNIX オペレーティング・システム

/opt/IBM/db2/V8.1

DB2 クライアントをインストールした後は、リモート DB2 サーバーにアクセスするようにクライアントを構成してください。

ご使用の DB2 製品が、ローカル・コンピューターまたはネットワーク内の別のコンピューター上にある DB2 資料にアクセスするようにしたい場合には、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければなりません。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database および DB2 関連製品に関する資料が含まれています。DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX) を参照してください。

関連概念:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによるインストールの基礎』
- 80 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 84 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 19 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (Solaris オペレーティング環境)』
- 14 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX)』
- 31 ページの『構成アシスタント (CA) によるクライアント/サーバー接続の構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『サーバー・データベースへのリモート・アクセスの構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (UNIX)』
- 16 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (Linux)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2setup - DB2 のインストール・コマンド』

第 2 部 クライアント/サーバー間通信の構成

第 4 章 クライアント/サーバーのサポート

クライアント/サーバー通信のシナリオ

次の表は、DB2 クライアントを DB2 サーバーに接続する際に使用できる通信プロトコルを示しています。DB2 Workgroup Server Edition と DB2 Enterprise Server Edition は、ホストまたは OS/400 クライアントからの要求を処理できます。

表 3. クライアント/サーバー通信のシナリオ

| | AIX、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境のサーバー | Windows NT/Windows 2000/Windows XP/Windows Server 2003 のサーバー |
|---|---|--|
| OS/400 V5R1 クライアント | TCP/IP | TCP/IP |
| AIX、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境のクライアント | TCP/IP | TCP/IP |
| OS/390 または z/OS クライアント | TCP/IP | TCP/IP |
| VM V6 クライアント | TCP/IP | TCP/IP |
| VSE V7 オンライン・クライアント | TCP/IP | TCP/IP |
| VM V7 クライアント | TCP/IP | TCP/IP |
| Windows 98 および Windows ME のクライアント | TCP/IP | NPIPE NetBIOS TCP/IP |
| Windows NT/Windows 2000 のクライアント | TCP/IP | NPIPE NetBIOS TCP/IP |
| Windows XP/Windows Server 2003 のクライアント | TCP/IP | NPIPE NetBIOS TCP/IP |

関連概念:

- 3 ページの『DB2 クライアント』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『手動インストール後の DB2 サーバーのセットアップ』

関連資料:

- 6 ページの『サポートされているクライアント構成とサポートされていないクライアント構成』

第 5 章 構成アシスタントを使用したクライアント/サーバー間通信の構成

構成アシスタント (CA) によるクライアント/サーバー接続の構成

このトピックは、構成アシスタント (CA) を使用して DB2 クライアントをリモート・データベースに接続する方法について説明します。構成アシスタントは、DB2 GUI ツールの 1 つで、これを使用するとデータベース接続やその他のデータベース設定を構成できます。以前のリリースの DB2 では、構成アシスタント (CA) のことをクライアント構成アシスタント (CCA) と呼んでいました。

コマンド行プロセッサ (CLP) を使用してクライアントからサーバーへの接続を構成することもできます。

ご使用の DB2 クライアントに CA をインストールしなければなりません。CA は、DB2 Administration Client および DB2 Application Development Client の一部として使用できます。

インバウンド・クライアント要求を受け入れるようにリモート・サーバーを構成しなければなりません。デフォルトでは、サーバーのインストール・プログラムは、サーバー上のインバウンド・クライアント接続用の大部分のプロトコルを検出して構成します。

以下の方式を使用して、データベースとの接続を構成できます。

- ディスカバリーによるデータベース接続
- プロファイルによるデータベース接続
- 構成アシスタント (CA) によるデータベース手動接続

どの方式を使用する必要があるか:

ディスカバリーによるデータベース接続

接続したいデータベースに関する情報がない場合は、この方式を使用してください。この方式は、ネットワークを検索し、使用可能なデータベースをすべてリストします。CA のディスカバリー機能が DB2 システムについての情報を戻すためには、サーバー上で DB2 Administration Server (DAS) が実行されていて使用可能になっている必要があります。

プロファイルによるデータベース接続

ターゲット・データベースにアクセスするのに必要な情報をすべて含むファイルがある場合は、この方式を使用してください。アクセス・プロファイル・ファイル中に指定されている複数のデータベースをカタログして接続する場合にも、この方式を使用できます。

データベース手動接続

ターゲット・データベースに接続するのに必要な情報をすべて知っている場合は、この方式を使用してください。以下の情報を知っている必要があります。

- ターゲット・データベースのあるサーバーでサポートされている通信プロトコル
- サーバーのプロトコルにとって適切な通信パラメーター
- データベースの名前

関連タスク:

- 35 ページの『ディスカバリーによるデータベース接続の構成』
- 34 ページの『プロファイルによるデータベース接続の構成』
- 32 ページの『構成アシスタント (CA) によるデータベース接続の手動構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『ローカル DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 43 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント/サーバー接続の構成』

データベース接続の構成

構成アシスタント (CA) によるデータベース接続の手動構成

接続したいデータベースおよびデータベースが常駐するサーバーについての情報がある場合、手動ですべての構成情報を入力することができます。この方式は、コマンド行プロセッサを使用してコマンドを入力するのと類似していますが、パラメーターがグラフィカルに提示されます。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認します。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加しようとしている場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認します。

手順:

CA を使用して手動でシステムにデータベースを追加するには、以下のタスクを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「**選択 (Selected)**」で、「**ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)**」を選択します。
4. 「**データベースへの接続を手動で構成する (Manually configure a connection to a database)**」ラジオ・ボタンを選択して、「**次へ (Next)**」をクリックします。

5. Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用している場合には、DB2 ディレクトリーを保持したい場所に対応するラジオ・ボタンを選択します。
「次へ (Next)」をクリックします。
6. 「プロトコル (Protocol)」リストから、使用したいプロトコルに対応するラジオ・ボタンを選択します。

使用しているシステムに DB2 Connect がインストールされており、TCP/IP または APPC を選択する場合には、「データベースはホストまたは OS/400 システムに物理的に常駐 (The database physically resides on a host or OS/400 system)」を選択できます。このチェック・ボックスを選択すると、ホストまたは OS/400 データベースに確立したい接続のタイプを選択するオプションが表示されます。

- DB2 Connect ゲートウェイ経由の接続を確立するには、「ゲートウェイ経由でサーバーに接続 (Connect to the server via the gateway)」ラジオ・ボタンを選択します。
- 直接接続を確立するには、「サーバーに直接接続 (Connect directly to the server)」ラジオ・ボタンを選択します。

「次へ (Next)」をクリックします。

7. 必要な通信プロトコル・パラメーターを入力し、「次へ (Next)」をクリックします。
8. 追加したいリモート・データベースのデータベース別名を「データベース名 (Database name)」フィールドに入力し、ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力します。

ホストまたは OS/400 データベースを追加している場合、OS/390 または z/OS データベースのロケーション名、OS/400 データベースの RDB 名、VSE または VM データベースの DBNAME を、「データベース名 (Database name)」フィールドに入力します。さらにオプションとして、このデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力できます。

「次へ (Next)」をクリックします。

9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていないならばなりません。
10. 「ノード・オプションの指定 (Specify the node options)」ウィンドウで、オペレーティング・システムを選択し、接続したいデータベース・システムのリモート・インスタンス名を入力します。
11. 「システム・オプションを指定する (Specify the system options)」ウィンドウで、システム名、ホスト名、およびオペレーティング・システムが正しいことを確認します。オプションで注釈を入力できます。「次へ (Next)」をクリックします。
12. 「セキュリティ・オプションを指定する (Specify the security options)」ウィンドウで、認証に使用するセキュリティ・オプションを指定します。
13. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。メニューから「終了 (Exit)」を選択して、CA を閉じます。

関連タスク:

- 35 ページの『ディスカバリーによるデータベース接続の構成』
- 34 ページの『プロファイルによるデータベース接続の構成』
- 40 ページの『構成アシスタントを使用したデータベース接続のテスト』

プロファイルによるデータベース接続の構成

サーバー・プロファイルには、システム上のサーバー・インスタンス、およびそれぞれのサーバー・インスタンスのデータベースについての情報が含まれています。クライアント・プロファイルには、別のクライアント・システム上にカタログが作成されているデータベース情報が含まれています。

サーバー・プロファイルを使用して 1 つのデータベースを構成するには、以下のタスクのステップに従います。複数のデータベースに対する接続を同時に構成したい場合は、構成アシスタント (CA) のインポート関数を使用する必要があります。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認します。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加しようとしている場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認します。

手順:

プロファイルを使用してデータベース接続を構成するには、以下のタスクを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「**選択 (Selected)**」で、「**ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)**」を選択します。
4. 「**プロファイルを使用する (Use a profile)**」ラジオ・ボタンを選択し、「**次へ (Next)**」をクリックします。
5. 「**...**」をクリックして、プロファイルを選択します。
6. 「**ロード (Load)**」をクリックして、プロファイル中のデータベースを選択します。
7. 「**次へ (Next)**」をクリックします。
8. ローカル・データベース別名を「**データベース別名 (Database alias)**」フィールドに入力し、オプションでこのデータベースについて記述する注釈を「**注釈 (Comment)**」フィールドに入力します。「**次へ (Next)**」をクリックします。
9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録する必要があります。「**ODBC 用にこのデータベースを登録 (Register this database for ODBC)**」チェック・ボックスが選択されていることを確認します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
10. 「**完了 (Finish)**」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。

関連タスク:

- 37 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』
- 38 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

ディスカバリーによるデータベース接続の構成

構成アシスタントのディスカバリー機能を使うと、ネットワークでデータベースを検索できます。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認します。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加しようとしている場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認します。

制約事項:

以下の場合、ディスカバリー機能を使用してリモート・システムを検出できないことがあります。

- Administration Server がリモート・システムで実行されていません。
- ディスカバリー関数がタイムアウトになっています。デフォルトでは、ディスカバリー関数は 10 秒間ネットワークを検索します。この場合、時間が短すぎてリモート・システムを検出できないことがあります。DB2DISCOVERYTIME レジストリー変数を設定して、10 秒より長い期間を指定できます。
- ディスカバリー要求が実行されているネットワークが、ディスカバリー要求がその対象のリモート・システムに達しないように構成されています。

制約事項:

CA のディスカバリー機能が DB2 システムについての情報を戻すためには、DB2 Administration Server (DAS) が実行されていて使用可能になっている必要があります。

手順:

ディスカバリーを使用してシステムにデータベースを追加するには、以下のタスクを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「選択 (Selected)」で、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)」を選択します。「データベースの追加 (Add Database)」ウィザードが表示されます。
4. 「ネットワークの検索 (Search the network)」ラジオ・ボタンを使用して、「次へ (Next)」をクリックします。
5. 「既知のシステム (Known Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。クライアントに認識されているすべてのシステムのリストが表示されます。

「その他のシステム (Other Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。ネットワーク上のすべてのシステムのリストが表示されます。

6. インスタンスとデータベースのリストを展開し、追加したいデータベースを選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
7. ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力し、オプションでこのデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力します。
8. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
9. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、追加したデータベースを使えるようになりました。「クローズ (Close)」をクリックして、CA を終了します。

関連タスク:

- 32 ページの『構成アシスタント (CA) によるデータベース接続の手動構成』
- 34 ページの『プロファイルによるデータベース接続の構成』
- 40 ページの『構成アシスタントを使用したデータベース接続のテスト』

クライアント・プロファイル

クライアント・プロファイル

クライアント・プロファイルは DB2® クライアントとサーバーの間のデータベース接続を構成するのに使用します。クライアント・プロファイルは、構成アシスタント (CA) のエクスポート機能を使用するか、**db2cfexp** コマンドを使用して、クライアントで生成されます。クライアント・プロファイルに含まれている情報は、エクスポート処理中に判別されます。

選択した設定によって、以下のような情報が組み込まれます。

- データベース接続情報 (CLI または ODBC 設定を含む)
- クライアント設定 (データベース・マネージャーの構成パラメーターおよび DB2 レジストリー変数を含む)
- CLI または ODBC 共通パラメーター
- ローカル NetBIOS 通信サブシステムの構成データ

判別されたクライアント・プロファイル内の情報は、CA のインポート機能を使用するか **db2cfimp** コマンドを使ってプロファイルをインポートすることにより、他のクライアントを構成するのに使用できます。クライアントは、既存のプロファイル中にある構成情報の全体またはサブセットをインポートできます。

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『プロファイルのエクスポートとインポート』
- 37 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』

- 38 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfimp - 接続構成インポート・ツール・コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfexp - 接続構成エクスポート・ツール・コマンド』

構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート

クライアント・プロファイルは、DB2 クライアントとサーバーの間の接続を作成するときに使用します。クライアント・プロファイルに含まれている情報は、エクスポート処理中に判別されます。クライアント・プロファイル内の情報は判別されると、インポート処理を使用して、他のクライアントの構成に使用できます。

手順:

構成アシスタント (CA) のエクスポート機能を使用してクライアント・プロファイルを作成するには、次の手順に従います。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. 「構成 (Configure)」メニューから、「プロファイルのエクスポート (Export Profile)」を選択します。
4. 以下のオプションから 1 つを選択してください。

すべて (All)

システムでカタログされたすべてのデータベース、およびこのクライアントのすべての構成情報を含むプロファイルを作成したい場合を選択します。クライアント・プロファイルの名前を入力して、「保管 (Save)」をクリックします。

データベース接続 (Database Connections)

システムでカタログされたすべてのデータベースを含み、このクライアントのすべての構成情報を含まないプロファイルを作成したい場合を選択します。クライアント・プロファイルの名前を入力して、「保管 (Save)」をクリックします。

カスタマイズ (Customize)

システムでカタログされたデータベースのサブセット、またはこのクライアントの構成情報のサブセットを選択したい場合を選択します。「プロファイルのエクスポートのカスタマイズ (Customize Export Profile)」ウィンドウで、次のようにします。

- a. クライアント・プロファイルの名前を入力します。

- b. 「データベース接続 (Database connections)」チェック・ボックスを選択して、エクスポートするクライアント・プロファイルにデータベース接続を含めます。
- c. 「使用可能なデータベース別名 (Available database aliases)」ボックスからエクスポートするデータベースを選択して、「>」をクリックします。すると、それらのデータベースが「選択されたデータベース別名 (Selected database aliases)」ボックスに追加されます。使用可能なすべてのデータベースを「選択されたデータベース別名 (Selected database aliases)」ボックスに追加するには、「>>」をクリックします。
- d. ターゲット・クライアント用に設定したいオプションに対応するチェック・ボックスを選択します。
- e. 「エクスポート (Export)」をクリックします。これで作業は完了です。
- f. 「結果 (Results)」タブに表示される結果を確認します。

このタスクを完了した後は、作成したクライアント・プロファイルを使用して、インポート機能によって他のクライアントを構成できます。

関連概念:

- 36 ページの『クライアント・プロファイル』

関連タスク:

- 34 ページの『プロファイルによるデータベース接続の構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『プロファイルのエクスポートとインポート』
- 38 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成

クライアント・プロファイルは、DB2 クライアントとサーバーの間の接続を作成するときに使用します。クライアント・プロファイルに含まれている情報は、エクスポート処理中に判別されます。クライアント・プロファイル内の情報は判別されると、インポート処理を使用することにより、他のクライアントの構成に使用できません。

「データベースの追加 (Add Database)」ウィザードではなく、構成アシスタントのプロファイルのインポート機能を使用すると、複数のデータベースの接続情報をインポートできます。「データベースの追加 (Add Database)」ウィザードでは、一度に 1 つのデータベースしか追加できません。

手順:

構成アシスタント (CA) を使用してクライアント・プロファイルを構成するには、次の手順に従います。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。

2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. 「構成 (Configure)」メニューから、「プロファイルのインポート (Import Profile)」を選択します。
4. 以下のインポート・オプションから 1 つを選択してください。クライアント・プロファイル中の情報すべてまたはサブセットのインポートを選択できます。

すべて (All)

クライアント・プロファイル内のすべてをインポートするには、このオプションを選択します。インポートしたいクライアント・プロファイルを開きます。インポートの結果を示す DB2 メッセージが表示されます。

カスタマイズ (Customize)

クライアント・プロファイルで定義される特定のデータベースまたは設定をインポートするには、このオプションを選択します。「**プロファイルのインポートのカスタマイズ (Customize Import Profile)**」ウィンドウで、次のようにします。

- a. インポートしたいクライアント・プロファイルを選択して、「**ロード (Load)**」をクリックします。
- b. 「**使用可能なデータベース別名 (Available database aliases)**」ボックスからインポートするデータベースを選択して、「>」をクリックします。すると、それらのデータベースが「**選択されたデータベース別名 (Selected database aliases)**」ボックスに追加されます。使用可能なすべてのデータベースを「**選択されたデータベース別名 (Selected database aliases)**」ボックスに追加するには、「>>」をクリックします。
- c. カスタマイズしたいオプションに対応するチェック・ボックスを選択します。
- d. 「**インポート (Import)**」をクリックします。これで作業は完了です。
- e. 「**結果 (Results)**」タブに表示される結果を確認します。

関連概念:

- 36 ページの『クライアント・プロファイル』

関連タスク:

- 34 ページの『プロファイルによるデータベース接続の構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『プロファイルのエクスポートとインポート』
- 37 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』

LDAP ディレクトリー・サポートに関する考慮事項

LDAP 対応環境では、DB2[®] サーバーおよびデータベースについてのディレクトリー情報は、LDAP ディレクトリーに保管されます。新しくデータベースが作成されると、データベースは自動的に LDAP ディレクトリーに登録されます。データベース接続の際には、DB2 クライアントは LDAP ディレクトリーにアクセスして必要なデータベースとプロトコル情報を取り出し、この情報を使用してデータベースに接続します。

LDAP プロトコル情報を構成するのに構成アシスタント (CA) を実行する必要はありません。ただし、以下のことを実行するには、今まで通り LDAP 環境で CA を使用できます。

- 手動で LDAP ディレクトリーにデータベースをカタログします。
- データベースを ODBC データ・ソースとして登録します。
- CLI/ODBC 情報を構成します。
- LDAP ディレクトリーにカタログされたデータベースを除去します。

関連タスク:

- 32 ページの『構成アシスタント (CA) によるデータベース接続の手動構成』

接続のテスト

構成アシスタントを使用したデータベース接続のテスト

クライアント/サーバー接続を構成した後、データベース接続をテストする必要があります。

手順:

データベース接続をテストするには、以下のタスクを実行します。

1. 「**構成アシスタント (Configuration Assistant)**」を開始します。
2. 詳細ビューでデータベースを強調表示してから、「**テスト接続 (Test Connection)**」を「**選択 (Selected)**」メニューから選択します。「テスト接続 (Test Connection)」ウィンドウが表示されます。
3. テストする接続の種類を選択します (デフォルトは **CLI**)。複数の種類を同時にテストできます。リモート・データベースの有効なユーザー ID およびパスワードを入力し、「**テスト接続 (Test Connection)**」をクリックします。接続が正常に確立された場合、接続が確立されたことを確認するメッセージが「**結果 (Results)**」ページに表示されます。

接続検査に失敗した場合には、ヘルプ・メッセージを受け取ります。誤って指定した設定を変更するには、詳細ビューでデータベースを選択してから、「**データベースの変更 (Change Database)**」を「**選択 (Selected)**」メニューから選択します。

関連タスク:

- 35 ページの『ディスカバリーによるデータベース接続の構成』

- 32 ページの『構成アシスタント (CA) によるデータベース接続の手動構成』
- 34 ページの『プロファイルによるデータベース接続の構成』

第 6 章 コマンド行プロセッサを使用したクライアント/サーバー間通信の構成

コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント/サーバー接続の構成

このタスクでは、コマンド行プロセッサ (CLP) を使用して、DB2 クライアントからリモート・データベース・サーバーへの接続を構成する方法を説明します。

構成アシスタントを使用して、クライアントからサーバーへの接続を構成することもできます。

前提条件:

クライアントからサーバーへの接続を構成する前に、

- DB2 サーバーおよび DB2 クライアントで、通信を構成する必要があります。ご使用のオペレーティング・システムによって、通信は 名前付きパイプ、NetBIOS または TCP/IP のいずれかとなります。
- サポートされる、クライアントからサーバーへの接続シナリオの 1 つを使用する必要があります。接続シナリオは、どのオペレーティング・システムがどの通信方式またはプロトコルを使用できるかを概説しています。

制約事項:

- Windows および UNIX 上の DB2 UDB サーバーは、APPC を使用したインバウンド・クライアント接続を受け入れなくなりました。DB2 Connect がインストールされている場合は、DB2 クライアントは引き続き、APPC を使用してホスト・システムに接続することができます。
- NetBIOS を使用して Windows クライアントから、UNIX ベースのシステム上で稼働しているサーバーに接続することはできません。

手順:

以下のようにして、コマンド行プロセッサを使用して、クライアントからサーバーへの接続を構成します。

1. 通信パラメーター値を確認し、記録します。
2. クライアントで適切な通信プロトコルを構成します。名前付きパイプについては、構成は必要ありません。
3. 以下の方式のいずれかを使用して、DB2 クライアントからデータベース・ノードをカタログします。採用する方式は、カタログするシステム上の通信プロトコル・セットアップに基づいて決めます。
 - DB2 クライアントから TCP/IP ノードをカタログします。
 - DB2 クライアントから NetBIOS ノードをカタログします。
 - DB2 クライアントから名前付きパイプ・ノードをカタログします。
4. DB2 クライアント上でデータベースをカタログします。
5. クライアントからサーバーへの接続をテストします。

関連タスク:

- 51 ページの『DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ』
- 53 ページの『DB2 クライアントからの NetBIOS ノードのカタログ』
- 54 ページの『クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ』
- 54 ページの『CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ』
- 57 ページの『CLP によるクライアント/サーバー接続のテスト』
- 31 ページの『構成アシスタント (CA) によるクライアント/サーバー接続の構成』

通信パラメーター値の確認と記録

クライアントからサーバーへの接続の構成のための TCP/IP パラメーター値ワークシート

構成ステップでは、次の表内の「使用値 (Your Value)」列を使用してください。

表 4. TCP/IP パラメーター値ワークシート

| パラメーター | 説明 | サンプル値 | 使用値 |
|--|--|--|-----|
| ホスト名 • ホスト名 (<i>hostname</i>) または • IP アドレス (<i>ip_address</i>) | リモート・ホストの <i>hostname</i> または <i>ip_address</i> を使用します。 このパラメーターを解決するには、次のようにします。 <ul style="list-style-type: none">• サーバーで hostname コマンドを入力して、<i>hostname</i> を取得します。• ネットワーク管理者に <i>ip_address</i> を問い合わせるか、ping hostname コマンドを入力します。• UNIX システムでは、DB2DIR/bin/hostlookup hostname コマンドも使用できます。 ここで、 <i>DB2DIR</i> は DB2 がインストールされているディレクトリーを表します。 | myserver または 9.21.15.235 | |

表 4. TCP/IP パラメーター値ワークシート (続き)

| パラメーター | 説明 | サンプル値 | 使用値 |
|---|---|----------------------------|-----|
| サービス名 <ul style="list-style-type: none"> 接続サービス名 (svcname) または ポート番号/プロトコル (port_number/tcp) | <p>サービス・ファイルに必要な値</p> <p>接続サービス名は、クライアントでの接続ポート番号 (port_number) を表す任意の名前です。</p> <p>ポート番号は、サーバー・システム上のサービス・ファイルの中で svcname パラメーターのマップ先になっているポート番号と同じでなければなりません。</p> <p>(svcname パラメーターはサーバー・インスタンス上のデータベース・マネージャー構成ファイル内にあります。) この値は、他のアプリケーションで使用されてはならず、 services ファイル内でユニークでなければなりません。</p> <p>UNIX プラットフォームでは、一般的にこの値は 1024 以上でなければなりません。</p> <p>サーバーを構成するのに使用される値については、データベース管理者に問い合わせてください。</p> | server1 または 3700/tcp | |
| ノード名 (node_name) | <p>接続を確立しようと試みているノードを記述するローカル別名またはニックネーム。任意の名前を選択することができますが、ローカル・ノード・ディレクトリー内のノード名値はそれぞれユニークでなければなりません。</p> | db2node | |

関連タスク:

- 47 ページの『CLP によるクライアントでの TCP/IP 通信の構成』
- 43 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント/サーバー接続の構成』

NetBIOS パラメーター値ワークシート

このワークシートは、構成ステップにおいて NetBIOS 通信を構成するために必要な値を記録するために使用します。

表 5. NetBIOS パラメーター値ワークシート

| パラメーター | 説明 | サンプル値 | 使用値 |
|----------------------------|-----------------------------|-------|-----|
| 論理アダプター番号 (adapter_number) | NetBIOS 接続に使われるローカル論理アダプター。 | 0 | |

表 5. NetBIOS パラメーター値ワークシート (続き)

| パラメーター | 説明 | サンプル値 | 使用値 |
|--|--|---------|-----|
| ワークステーション名 (<i>nname</i>) - クライアント側 | クライアント・ワークステーションの NetBIOS 名 <i>nname</i> はユーザーが選んだ名前です。この名前はネットワーク内のすべての NetBIOS ノードの中でユニークでなければなりません。 <i>nname</i> の最大長は 8 文字です。 | client1 | |
| ワークステーション名 (<i>nname</i>) - サーバー側 | サーバー・ワークステーションの NetBIOS 名 <i>nname</i> の最大長は 8 文字です。この名前は、サーバーのデータベース・マネージャー構成ファイルの中に含まれています。 | server1 | |
| ノード名 (<i>node_name</i>) | 接続を確立しようと試みているノードを記述するローカル別名またはニックネーム。任意の名前を選択することができますが、ローカル・ノード・ディレクトリー内のすべてのノード名値はユニーク値でなければなりません。 | db2node | |

関連タスク:

- 49 ページの『CLP によるクライアントでの NetBIOS 通信の構成』
- 43 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント/サーバー接続の構成』

クライアントでの名前付きパイプ構成のための名前付きパイプ・パラメーター値ワークシート

名前付きパイプ通信を構成するために必要なパラメーター値に関して、下記のワークシートを使用してください。

表 6. 名前付きパイプ・パラメーター値ワークシート

| パラメーター | 説明 | サンプル値 | 使用値 |
|--------------------------------------|---|---------|-----|
| コンピューター名 (<i>computer_name</i>) | サーバー・マシンのコンピューター名。 サーバー・マシンで、このパラメーターの値を見付けるには、「スタート」ボタンをクリックし、「設定」→「コントロール パネル」を選択します。「ネットワーク」フォルダーをダブルクリックし、「識別情報」タブを選択します。コンピューター名を記録します。 | server1 | |
| インスタンス名 (<i>instance_name</i>) | 接続先となるサーバー上のインスタンスの名前。 | db2 | |
| ノード名 (<i>node_name</i>) | 接続を確立しようとしているノードを記述するローカル別名またはニックネーム。任意の名前を選択することができますが、ローカル・ノード・ディレクトリー内のノード名値はそれぞれユニークでなければなりません。 | db2node | |

関連タスク:

- ・ 「インストールおよび構成 補足」の『主題に関するトピック集』
- ・ 43 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント/サーバー接続の構成』

DB2 クライアントでの通信の構成

TCP/IP 通信の構成

CLP によるクライアントでの TCP/IP 通信の構成

ここでは、CLP を使用することによって、クライアントで TCP/IP 通信を構成する方法について説明します。

前提条件:

その DB2 クライアントで TCP/IP が機能することを確認してください。クライアントからサーバーへの接続を確立するには、DB2 サーバー上でも TCP/IP が機能していなければなりません。クライアントからサーバーへの TCP/IP 機能性を検査するには、サーバー・マシンで **hostname** を入力し、クライアント・マシンからそのホスト名に対して ping します。

手順:

DB2 クライアントで TCP/IP 通信を構成するには、以下のタスクを実行します。

1. サーバーのホスト・アドレスを解決します。
2. DB2 クライアントでサービス・ファイルを更新します。

関連タスク:

- 48 ページの『クライアント/サーバー接続の構成のためにサーバー・ホスト・アドレスを解決する』
- 49 ページの『クライアント上のサービス・ファイルの更新』
- 「インストールおよび構成 補足」の『主題に関するトピック集』
- 49 ページの『CLP によるクライアントでの NetBIOS 通信の構成』

クライアント/サーバー接続の構成のためにサーバー・ホスト・アドレスを解決する

クライアントでは、接続を確立するために DB2 サーバーのホスト・アドレスを使用します。ネットワークにネーム・サーバーがある場合、またはサーバーの IP アドレス (*ip_address*) を直接指定する場合には、TCP/IP ノードのカタログへ進んでください。ドメイン・ネーム・サーバーがネットワークに存在しない場合には、ローカル・ホスト・ファイル内のサーバーの IP アドレス (*ip_address*) にマップするホスト名を直接指定することができます。

ネットワーク情報サービス (NIS) を使用する UNIX クライアントをサポートすることを計画していて、ネットワークでドメイン・ネーム・サーバーを使用していない場合には、NIS マスター・サーバーにある *hosts* ファイルを更新しなければなりません。

ローカル・ホスト・ファイルの場所は、下記のとおりです。

表7. ローカル・ホスト・ファイルの場所

| オペレーティング・システム | ディレクトリ |
|--|--|
| Windows 98/Windows ME | <i>windows</i> |
| Windows NT/Windows 2000/Windows XP/Windows Server 2003 | <i>%SystemRoot%\system32\drivers\etc</i> (<i>%SystemRoot%</i> はシステムで定義されている環境変数) |
| UNIX | <i>/etc</i> |

手順:

テキスト・エディターを使用することによって、DB2 クライアントのホスト・ファイルに、サーバーの IP アドレスの項目を追加します。たとえば、

```
9.21.15.235    myserver    # IP address for myserver
```

ここで、

```
9.21.15.235
```

ip_address を表します。

```
myserver
```

hostname (ホスト名) を表します。

この項目について説明する注釈を表します。

サーバーが DB2 クライアントと同じドメイン内にない場合には、*myserver.spifnet.ibm.com* のような完全修飾されたドメイン・ネームを提供しなければなりません (*spifnet.ibm.com* はドメイン・ネーム)。

関連タスク:

- 49 ページの『クライアント上のサービス・ファイルの更新』
- 43 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント/サーバー接続の構成』

クライアント上のサービス・ファイルの更新

ポート番号 (*port_number*) を使用して TCP/IP ノードをカタログしようとしている場合、この作業は不要です。

前提条件:

ネットワーク情報サービス (NIS) を使用する UNIX クライアントを使用している場合には、NIS マスター・サーバーにある *services* ファイルを更新する必要があります。

手順:

テキスト・エディターを使用して、クライアントのサービス・ファイルに、接続サービス名およびポート番号を追加します。

サービス・ファイルの場所は、下記のとおりです。

表 8. サービス・ファイルの位置

| オペレーティング・システム | ディレクトリー |
|--|---|
| Windows 98/Windows ME | windows |
| Windows NT/Windows 2000/Windows XP/Windows Server 2003 | %SystemRoot%\system32\drivers\etc (%SystemRoot% はシステムで定義されている環境変数) |
| UNIX | /etc |

たとえば、

```
server1 50000/tcp # DB2 connection service port
```

ここで、

server1 接続サービス名を表します。

50000 接続ポート番号を表します (50000 がデフォルト)。

tcp 使用している通信プロトコルを表します。

この項目について説明する注釈の開始を示します。

関連タスク:

- 51 ページの『DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ』

NetBIOS 通信の構成

CLP によるクライアントでの NetBIOS 通信の構成

ここでは、DB2 コマンド行プロセッサ (CLP) を使用することによって、クライアント上で NetBIOS を構成する方法について説明します。この作業は、NetBIOS

を使用して DB2 クライアントから DB2 サーバーへの接続を構成する場合に実行します。接続は、構成アシスタントを使用して構成することもできます。

前提条件:

その DB2 クライアントで NetBIOS が機能することを確認してください。接続を確立するためには、DB2 サーバー上でも NetBIOS が構成されていなければなりません。

手順:

DB2 クライアントで NetBIOS 通信を構成するには、

1. NetBIOS 接続のために使用する論理アダプター番号を決定します。
2. データベース・マネージャーの構成ファイルを更新します。

関連タスク:

- 50 ページの『NetBIOS 接続に関するクライアントの論理アダプター番号の判別 (Windows)』
- 51 ページの『NetBIOS 接続のためのデータベース・マネージャー構成ファイルの更新』
- 31 ページの『構成アシスタント (CA) によるクライアント/サーバー接続の構成』

NetBIOS 接続に関するクライアントの論理アダプター番号の判別 (Windows)

これは、CLP を使用したクライアントでの NetBIOS の構成 のメインタスクの一部です。

CLP を使用してクライアントとサーバーの NetBIOS 接続を構成するには、クライアントの論理アダプター番号が必要です。

制約事項:

この手順が必要なのは、Windows オペレーティング・システムの場合だけです。

手順:

NetBIOS 接続の論理アダプター番号を判別するには、以下のタスクを実行します。

1. コマンド・プロンプトから **regedit** コマンドを入力してレジストリー・エディターを起動します。
2. **HKEY_LOCAL_MACHINE** フォルダを展開し、**Software/Microsoft/Rpc/NetBIOS** フォルダから、NetBIOS アダプターの割り当てを見つけます。
3. **ncacn_nb_nb x** で始まる項目をダブルクリックして、NetBIOS 接続に関連したアダプター番号を表示します。ここで、 x には 0、1、2... です (通常は **nb0** アダプターを選択します)。「**DWORD 値の編集 (Edit DWORD Value)**」ウィンドウの「**データ値 (Data value)**」の設定を記録します。

注: 接続の両端で同じエミュレーションを使用している必要があります。

CLP を使用したクライアントでの NetBIOS の構成 の次のステップは、データベース・マネージャーの構成ファイルの更新です。

関連資料:

- 45 ページの『NetBIOS パラメーター値ワークシート』

NetBIOS 接続のためのデータベース・マネージャー構成ファイルの更新

CLP を使用してクライアントからサーバーへの NetBIOS 接続を構成するには、データベース・マネージャーの構成ファイルを更新する必要があります。

制約事項:

データベース・マネージャー構成ファイルを、クライアントのワークステーション名 (*nname*) パラメーターを使用して更新しなければなりません。

手順:

データベース・マネージャーの構成ファイルを更新するには、以下のタスクを実行します。

1. システム管理 (SYSADM) 権限をもったユーザーとしてシステムにログオンします。
2. コマンド行プロセッサに以下のコマンドを発行して、クライアントのワークステーション名 (*nname*) パラメーターでデータベース・マネージャー構成ファイルを更新します。

```
update database manager configuration using nname nname
terminate
```

たとえば、クライアントのワークステーション名 (*nname*) が *client1* の場合には、次のようにします。

```
update database manager configuration using nname client1
terminate
```

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『リモート DB2 インスタンスの通信プロトコルの構成』
- 53 ページの『DB2 クライアントからの NetBIOS ノードのカタログ』

サーバー・ノードのカタログ

DB2 クライアントからの TCP/IP ノードのカタログ

TCP/IP ノードのカタログでは、DB2 クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードについて記述する項目が追加されます。この項目では、選択された別名 (*node_name*)、*hostname* (または *ip_address*)、およびクライアントがリモート・ホストにアクセスするときに使う *svccname* (または *port_number*) を指定します。

前提条件:

- システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限をもっていること、または `catalog_noauth` オプションが ON に設定されていることが必要です。 `root` 権限を使用してノードをカタログすることはできません。

手順:

TCP/IP ノードのカタログを実行するには、以下のタスクを実行します。

1. システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限のあるユーザーとしてシステムにログオンします。
2. UNIX クライアントを使用している場合には、下記のようにしてインスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、 Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

ここで、*INSTHOME* はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

3. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。 Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。 UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
4. コマンド行プロセッサに次のようなコマンドを入力して、ノードをカタログします。

```
db2 => catalog tcpip node node_name remote hostname|ip_address
      server service_name|port_number [remote_instance instance_name]
      [system system_name] [ostype os_type]
```

```
db2 => terminate
```

ここで、

- `node_name` は、カタログするデータベースが含まれているコンピューターに対して設定可能なニックネームです。
- `remote_instance` は、データベースが存在するサーバー・インスタンスの名前を表します。
- `system` は、サーバーを識別するための DB2 システム名です。
- `ostype` は、サーバーのオペレーティング・システムのタイプです。

注:

- a. **terminate** コマンドは、ディレクトリー・キャッシュをリフレッシュするために必要です。
- b. `remote_instance`、`system`、および `ostype` はオプションですが、DB2 ツールを使用するユーザーの場合は必須です。
- c. クライアントで使用される `service_name` は、サーバーのものと同じである必要はありません。しかし、そのマップ先ポート番号は同じでなければなりません。

例:

ポート番号 50000 を使用しているリモート・サーバー *myserver.ibm.com* 上で *db2node* を呼び出すためのノードをカタログするには、**db2** プロンプトで次のように入力します。

```
db2 => catalog tcpip node db2node remote myserverserver 50000
DB20000I The CATALOG TCP/IP NODE command completed successfully.
DB21056W Directory changes may not be effective until the directory cache is
refreshed.
```

```
db2 => terminate
DB20000I The TERMINATE command completed successfully.
```

関連タスク:

- 47 ページの『CLP によるクライアントでの TCP/IP 通信の構成』
- 57 ページの『CLP によるクライアント/サーバー接続のテスト』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG TCP/IP NODE コマンド』

DB2 クライアントからの NetBIOS ノードのカタログ

NetBIOS ノードのカタログでは、クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードを記述する項目が追加されます。ノードの項目名には、選択したノード別名 (*node_name*) を使用します。この項目では、クライアントがリモート DB2 サーバーにアクセスするために使用するクライアントの論理アダプター番号 (*adapter_number*) とサーバーのワークステーション名 (*nname*) を指定します。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンする必要があります。DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムへデータベースを追加する場合は、インスタンス上にシステム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限のあるユーザーとしてシステムにログオンします。
- これらのパラメーター値の識別については、NetBIOS パラメーター値ワークシートNetBIOS パラメーター値ワークシートを参照してください。

手順:

NetBIOS ノードのカタログを実行するには、次のようにします。

```
db2 => catalog netbios node node_name remote nname adapter adapter_number
```

```
db2 => terminate
```

たとえば、*db2node* というノードにリモート・データベース・サーバー *server1* をカタログするには、論理アダプター番号 *0* を使用して、以下のようになります。

```
db2 => catalog netbios node db2node remote server1 adapter 0
```

```
db2 => terminate
```

関連タスク:

- 49 ページの『CLP によるクライアントでの NetBIOS 通信の構成』
- 54 ページの『CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ』

関連資料:

- 45 ページの『NetBIOS パラメーター値ワークシート』
- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG NETBIOS NODE コマンド』

クライアントからの名前付きパイプ・ノードのカタログ

名前付きパイプ・ノードのカタログでは、クライアントのノード・ディレクトリーに、リモート・ノードを記述する項目が追加されます。この項目では、クライアントがリモート DB2 サーバーにアクセスするために使用するものとして選択された別名 (*node_name*)、リモート・サーバーのワークステーション名 (*computer_name*)、およびインスタンス名 (*instance_name*) を指定します。

手順:

DB2 クライアントで名前付きパイプ・ノードのカタログを実行するには、コマンド行プロセッサ (CLP) で以下のコマンドを入力します。

```
db2 => db2 catalog npipe node node_name /
db2 => remote computer_name instance instance_name

db2 => terminate
```

例:

server1 というサーバーにある *db2node* というリモート・ノードをカタログするには、*db2* インスタンスで以下のようにします。

```
db2 => db2 catalog npipe node db2node remote server1 instance db2

db2 => terminate
```

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG NAMED PIPE NODE コマンド』
- 46 ページの『クライアントでの名前付きパイプ構成のための名前付きパイプ・パラメーター値ワークシート』

データベースのカタログ

CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ

ここでは、DB2 コマンド行プロセッサ (CLP) を使用することによって、DB2 クライアントからデータベースのカタログを作成する方法について説明します。

クライアント・アプリケーションからリモート・データベースにアクセスできるようにするには、クライアント上にそのデータベースのカタログを作成する必要があります。データベースを作成すると、特に指定しない限りそのデータベースは、データベース名と同じデータベース別名を使って、サーバー上で自動的にカタログされます。

DB2 クライアントとリモート・データベースの接続確立には、データベース・ディレクトリー内の情報、および (ノード不要のローカル・データベースのカタログを実行するのでない限り) ノード・ディレクトリー内の情報が使用されます。

制約事項:

DB2 では、root 権限によるデータベースのカatalog作成はサポートされていません。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID が必要です。
- システム管理 (SYSADM) 権限またはシステム・コントローラー (SYSCTRL) 権限をもっていること、または catalog_noauth オプションが ON に設定されていることが必要です。
- 下記のパラメーター値は、リモート・データベースのカatalogに適用されます。
 - データベース名
 - データベース別名
 - ノード名
 - 認証タイプ (オプション)
 - 注釈 (オプション)

それらのパラメーター値について、また使用する値を記録することについての詳細は、データベースのカatalogのためのパラメーター値ワークシートを参照してください。

- 下記のパラメーター値は、ローカル・データベースのカatalogに適用されます。
 - データベース名
 - ドライブ
 - データベース別名
 - 認証タイプ (オプション)
 - 注釈 (オプション)

ローカル・データベースは、いつでもアンカatalogおよび再カatalogできます。

手順:

クライアントでデータベースをカatalogするには、以下のタスクを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. オプション。データベースのカatalogのためのパラメーター値ワークシートデータベースのカatalogのためのパラメーター値ワークシートの「使用値」欄を更新してください。
3. UNIX プラットフォームで DB2 UDB を使用している場合には、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、 Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

INSTHOME はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

4. DB2 コマンド行プロセッサーを起動します。 Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。 UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。

5. コマンド行プロセッサに次のようなコマンドを入力して、データベースをカタログします。

```
db2 => catalog database database_name as database_alias at
      node node_name [ authentication auth_value ]
```

ここで、

- *database_name* は、カタログするデータベースの名前です。
- *database_alias* は、カタログするデータベースのローカル・ニックネームです。
- *node_name* は、カタログするデータベースが含まれているコンピューターに対して設定可能なニックネームです。
- *auth_value* は、データベースへの接続のときに行われる認証のタイプを指定します。このパラメーターのデフォルトは、サーバーで指定される認証タイプになります。認証タイプを指定すると、パフォーマンスが向上することがあります。認証値として指定できるオプションは、SERVER、CLIENT、SERVER_ENCRYPT、および KERBEROS です。

例:

sample というリモート・データベースを、ノード *db2node* においてローカル・データベース別名 *mysample* でカタログし、認証値として *server* を使用するには、次のコマンドを入力します。

```
db2 => catalog database sample as mysample at node db2node
      authentication server
```

```
db2 => terminate
```

関連タスク:

- 57 ページの『CLP によるクライアント/サーバー接続のテスト』

関連資料:

- 56 ページの『データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート』
- 「コマンド・リファレンス」の『CATALOG DATABASE コマンド』

データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート

下記のワークシートは、データベースのカタログのために必要なパラメーター値を記録するのに使用します。

表 9. データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート

| パラメーター | 説明 | サンプル値 | 使用値 |
|-------------------------------------|---|---------------|-----|
| データベース名 (<i>database_name</i>) | データベース作成時に、特に指定されていないなら、データベース別名はデータベース名に設定されます。たとえば、サーバー上に <i>sample</i> データベースが作成されると、データベース別名 <i>sample</i> も作成されます。データベース名は、サーバー上のリモート・データベース別名を表します。 | <i>sample</i> | |

表 9. データベースのカタログのためのパラメーター値ワークシート (続き)

| パラメーター | 説明 | サンプル値 | 使用値 |
|---------------------------------------|--|----------|-----|
| データベース別名 (<i>database_alias</i>) | リモート・データベースを表す任意のローカル・ニックネーム。これを指定しない場合には、デフォルトはデータベース名 (<i>database_name</i>) と同じになります。クライアントからデータベースに接続する際には、その名前を使用します。 | mysample | |
| 認証 (<i>auth_value</i>) | 実際の環境で必要な認証のタイプ。 | サーバー | |
| ノード名 (<i>node_name</i>) | データベースの常駐場所を記述したノード・ディレクトリ項目の名前。ノードをカタログするのに使用したのと同じ値をノード名 (<i>node_name</i>) に使用します。 | db2node | |

関連タスク:

- 54 ページの『CLP による DB2 クライアントからのデータベースのカタログ』
- 57 ページの『CLP によるクライアント/サーバー接続のテスト』
- 43 ページの『コマンド行プロセッサ (CLP) によるクライアント/サーバー接続の構成』

CLP によるクライアント/サーバー接続のテスト

ノードとデータベースのカタログが終わったら、データベースに接続して接続のテストを実行する必要があります。

前提条件:

- 接続をテストするためには、その前にデータベース・ノードとデータベースのカタログを実行しておくことが必要です。
- *userid* および *password* の値は、この 2 つが認証されるシステムで有効なものではなければなりません。デフォルトでは、認証はサーバー上で実行されます。サーバーのデータベース・マネージャー構成ファイルで指定されている認証パラメーターから、認証が判別されます。クライアントで構成された認証が、サーバーで構成された認証と不一致、または互換性がない場合は、エラーを受け取ります。
- DB2COMM で定義された正しいプロトコルによってデータベース・マネージャーが開始済みでなければなりません。まだ開始されていない場合には、データベース・サーバーで **db2start** コマンドを入力することによって、データベース・マネージャーを開始できます。

手順:

クライアントからサーバーへの接続をテストするには、以下のタスクを実行します。

1. UNIX プラットフォームで DB2 を使用している場合には、インスタンス環境をセットアップします。開始スクリプトを以下のように実行します。

bash、 Bourne、または Korn シェルの場合

```
. INSTHOME/sql1lib/db2profile
```

C シェルの場合

```
source INSTHOME/sql1lib/db2cshrc
```

INSTHOME はインスタンスのホーム・ディレクトリーです。

2. DB2 コマンド行プロセッサを起動します。Windows の場合は、コマンド・プロンプトで **db2cmd** コマンドを発行します。UNIX の場合は、コマンド・プロンプトで **db2** コマンドを発行します。
3. クライアント側で次のコマンドを入力することにより、リモート・データベースに接続します。

```
db2 => connect to database_alias user userid
```

たとえば、次のコマンドを入力します。

```
connect to mysample user jtris
```

パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。

接続が正常に完了したら、接続先のデータベースの名前を示したメッセージが表示されます。下記のようなメッセージが表示されます。

```
Database Connection Information
Database server = DB2/NT 8.1.0
SQL authorization ID = JTRIS
Local database alias = mysample
```

これで、データベースを使用できるようになります。たとえば、システム・カタログ表にリストされているすべての表名のリストを取り出したい場合、次のような SQL ステートメントを入力します。

```
select tablename from syscat.tables
```

db2 terminate コマンドの後で SQL ステートメントを発行すると、暗黙接続となります。デフォルト・データベースを定義するには、**db2set db2dbdft = <dbname>** コマンドを実行します。このコマンドを実行した後、データベースに接続せずに、たとえば **db2 select * from <table>** コマンドを実行します。このコマンドは、**db2dbdft** で定義されている値を使用します。デフォルト以外のデータベースに接続するには、CONNECT コマンドを使用して、選択したデータベースに明示的に接続しなければなりません。

データベース接続の使用が終わったら、**connect reset** コマンドを入力してデータベース接続を終了します。

関連資料:

- ・ 「コマンド・リファレンス」の『db2start - DB2 の開始コマンド』
- ・ 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

第 3 部 DB2 シン・クライアント

第 7 章 シン・クライアントの概要

シン・クライアント (Windows)

シン・クライアントとは、ネットワークを通じてコード・サーバー上のアプリケーションを実行する DB2[®] Administration Client のことです。シン・クライアントは、Windows[®] 32 ビット・オペレーティング・システムが実行されているワークステーションに、DB2 Administration Client または DB2 Connect Personal Edition (PE) をインストールすることによってセットアップできます。そのワークステーションは、クライアント側ではアプリケーションのためにとりあえず必要なモジュールだけを実行するためのコード・サーバー となります。

関連概念:

- 64 ページの『シン・クライアントに関する考慮事項 (Windows)』
- 61 ページの『シン・クライアント環境 (Windows)』

関連タスク:

- 67 ページの『シン・クライアント環境のセットアップ (Windows)』

シン・クライアント環境 (Windows)

シン・クライアントは、その他の DB2[®] クライアントや DB2 Connect[™] Personal Edition ワークステーションと同じように機能します。シン・クライアントとその他の DB2 クライアントまたは DB2 Connect Personal Edition インストール・システムとの間の主な違いは、シン・クライアント以外の環境の場合は各クライアントのローカル・ハード・ディスク上にコードがインストールされるのに対し、シン・クライアントの場合はコードがコード・サーバー上に存在している、ということです。シン・クライアントは、DB2 Administration Client や DB2 Connect Personal Edition のコードが必要になった時点で、コード・サーバーから LAN 接続を通じてコードを動的にロードします。各シン・クライアントで必要なのは、コード・サーバーとのリンクを確立するための最小限のコードと構成だけです。シン・クライアント上にローカルにインストールされる「占有スペース」はごくわずかであり、必要なモジュールのほとんどはコード・サーバーからロードされます。

このような方式による DB2 クライアントや DB2 Connect Personal Edition のサポートは、さまざまなビジネス・モデルに適しています。実際の環境にシン・クライアントをインストールすることには、さまざまなメリットがあります。このような環境を構築することにより、各シン・ワークステーションのディスク・スペース要件が少なくなり (ワークステーションごとに約 16-112 MB の節約が可能)、コードのインストール、更新、または移行は、1 つのマシンで実行するだけになります。

しかし、プログラム初期化において、システム・パフォーマンスが落ちる可能性があることに注意してください。それは、DB2 プログラムを LAN 接続を通じてコ

ード・サーバーからロードしなければならないためです。パフォーマンスがどの程度低下するかは、ネットワークとコード・サーバーの負荷や速度など、さまざまな要素に依存しています。

各シン・クライアント・マシンごとに、DB2 Administration Client と DB2 Connect Personal Edition のライセンスが必要です。

もう 1 つの重要な点は、通常の DB2 または DB2 Connect の場合と同じように、カタログ情報は各シン・クライアント・ワークステーションごとに維持しなければならないということです。カタログ・ファイルには、ワークステーションがデータベースに接続するために必要な情報がすべて含まれています。

各シン・クライアント・ワークステーションごとにデータベース接続を構成するステップは、構成アシスタント (CA) で提供されているプロファイルのエクスポートおよびインポート・オプションを使用することによって自動化できます。サーバーへ接続する最初のクライアントをセットアップした後は、その構成設定値のプロファイルを他のすべてのクライアントにエクスポートするだけです。

実際の環境で Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用すれば、各シン・クライアント・ワークステーションごとにデータベース接続を構成するステップは不要になります。データベースを DB2 サーバーから LDAP サーバーに登録したなら、LDAP 対応のクライアントは、接続時に自動的に接続情報を取り出します。

DB2 シン・クライアントのセットアップ例

DB2 シン・クライアント環境の典型的な構成例を、下記の図に示します。シン・クライアント・コード・サーバー・コンポーネントが含まれているマシン上に、DB2 Administration Client がインストールされています。構成後、このマシンは *DB2* クライアント・コード・サーバー と呼ばれます。

注:

1. シン・クライアント環境で、DB2 Run-Time Client および Application Development Client はサポートされていません。
2. シン・クライアントでは、**db2rspgn** コマンドはサポートされていません。
3. コード・サーバー・オプションを利用できるのは、**カスタム**・インストールの場合だけです。

DB2 シン・クライアント・ワークステーションは、必要に応じてコード・サーバーにアクセスし、コードを動的にロードします。コードがロードされると、すべての処理は DB2 シン・クライアント上でローカルに実行され、ターゲット DB2 サーバーとの接続が確立されます。

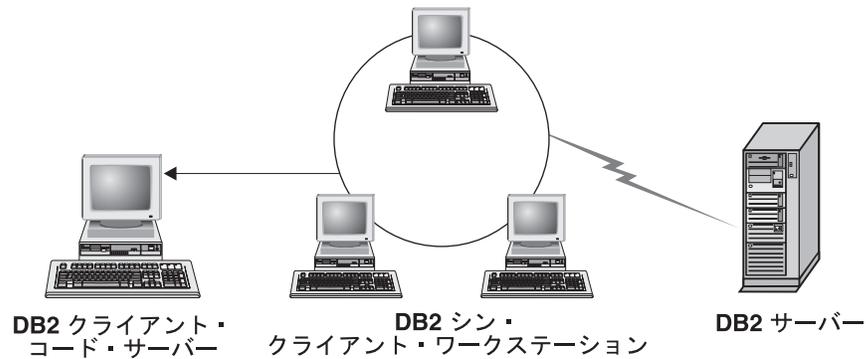


図1. 典型的な DB2 シン・クライアント環境

DB2 Connect シン・クライアントのセットアップ例

DB2 Connect シン・クライアント環境の典型的な構成例を、下記の図に示します。コード・サーバー・コンポーネントが含まれているマシン上に、DB2 Connect Personal Edition がインストールされています。構成後、このマシンは *DB2 Connect* コード・サーバー と呼ばれます。DB2 Connect Personal Edition ワークステーションだけが、DB2 Connect シン・ワークステーションに対して、コード・サーバーとして機能します。各 DB2 Connect シン・クライアントごとに DB2 Connect Personal Edition のクライアント・ライセンスが必要ですが、DB2 Administration Client のライセンスはないことに注意してください。

DB2 Connect シン・ワークステーションは、DB2 シン・クライアントと同じように動作します。コードは、必要に応じて DB2 Connect シン・コード・サーバーから動的にロードされます。コードがロードされると、すべての処理は DB2 Connect シン・ワークステーション上でローカルに実行されます。ターゲット・ホストまたは AS/400® DB2 サーバーとの接続は、ローカル・データベース構成情報を使用して確立されます。

DB2 Connect シン・クライアントは、ホストおよび AS/400 システム上のデータベースだけでなく、UNIX® および Windows® 版の DB2 サーバーにあるデータベースにもアクセスできます。

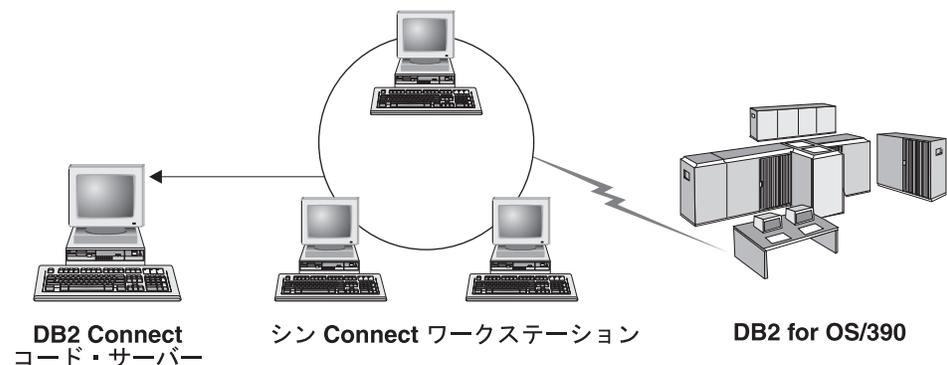


図2. 典型的な DB2 Connect シン・クライアント環境

関連概念:

- 64 ページの『シン・クライアントに関する考慮事項 (Windows)』

- 61 ページの『シン・クライアント (Windows)』

関連タスク:

- 67 ページの『シン・クライアント環境のセットアップ (Windows)』

シン・クライアントに関する考慮事項 (Windows)

Windows® NT、Windows 2000、または Windows XP マシンをコード・サーバーまたはシン・クライアントとして使用する場合には、考慮するべき点がいくつかあります。ここでは、Windows NT®、Windows 2000、または Windows XP で必要になる調整について説明します。

コード・サーバーでのクロスプラットフォーム・サポートのセットアップ

Windows 2000、Windows XP、または Windows NT 上のコード・サーバーは、Windows 98 または Windows ME 上のシン・クライアントをサポートできます。Windows 98 または Windows ME 上のコード・サーバーは、Windows 2000、Windows XP、または Windows NT 上のシン・クライアントをサポートできます。

Windows NT、Windows 2000、または Windows XP マシンにシン・ワークステーションを作成している場合は、残りのステップにおいて Windows NT、Windows 2000、または Windows XP コード・ベースを使用してください (たとえば `c:\sql11ib`)。

下記のコマンドは、Windows NT、Windows 2000、または Windows XP でのパラメーター値が異なります。

次のコマンドを入力して、コード・サーバーでクロスプラットフォーム・シン・ワークステーションを処理できるようにしてください。

```
bin\db2thn9x.bat target_platform
```

ここで、

- `target_platform` は、このディレクトリーがサポートするプラットフォームです。シン・ワークステーションで Windows NT、Windows 2000、または Windows XP が実行されている場合は、`nt` パラメーターを使用します。

すべてのシン・ワークステーションからコード・ディレクトリーを利用できるようにする

1. Windows コード・サーバーから、**Windows エクスプローラ**を起動します。
2. DB2® 製品をインストールしたディレクトリーを選択します。
`c:\sql11ib` ディレクトリーを使用することによって、Windows NT 上で実行されているシン・ワークステーションのための共用をセットアップします。
3. メニュー・バーから「ファイル」→「プロパティ」を選択します。
4. 「共有」タブをクリックします。
5. 「このフォルダを共有する」ラジオ・ボタンを選択します。
6. 「共有名」フィールドに、共有名を入力します。たとえば、NTCODESV と入力します。共有名には任意の名前を指定できます。

7. すべてのターゲット・シン・ワークステーションにおいて、すべてのユーザーがこのディレクトリーへ読み取りアクセスできるようにする必要があります。以下のタスクを実行して、すべてのユーザーに読み取りアクセスを指定します。
 - a. 「セキュリティ」タブを選択します。
 - b. 「詳細」をクリックします。「アクセス・コントロールの設定」ウィンドウが表示されます。
 - c. 「アクセス許可」タブで、**Everyone** グループをダブルクリックします。「アクセス許可の項目」ウィンドウが表示されます。
 - d. 「フォルダーの一覧/データの読み取り」オプションを「許可」に設定します。
 - e. 「OK」を何回かクリックして、すべてのウィンドウをクローズします。

シン・クライアントのネットワーク・ドライブをコード・サーバーにマップする

Windows NT、Windows 2000、および Windows XP コード・サーバーについては、次の点に注意してください。

- 「パス (Path)」フィールドは、Windows 2000 および Windows XP では「フォルダ (Folder)」フィールドです。
- Windows NT、Windows 2000、または Windows XP を実行している場合は、「接続名 (Connect as)」入力フィールドに、次の形式でユーザー情報を指定できます。

`domain¥username`

ここで、

domain

ユーザー・アカウントが定義されているドメイン。これは、アカウントがドメイン・アカウントで、かつリモート・コード・サーバーに対する読み取りアクセスを付与されているユーザー・アカウントでシステムにログオンしてはいない場合にのみ必須です。

username

このマシンにアクセスできるユーザー。これは、リモート・コード・サーバーに対する読み取りアクセスを付与されているユーザー・アカウントでシステムにログオンしてはいない場合、またはドメイン・パラメーターを指定した場合にのみ必須です。

関連概念:

- 61 ページの『シン・クライアント (Windows)』
- 61 ページの『シン・クライアント環境 (Windows)』

関連タスク:

- 67 ページの『シン・クライアント環境のセットアップ (Windows)』

第 8 章 シン・クライアントのインストール

シン・クライアント環境のセットアップ (Windows)

手順:

この例は、Windows 98 シン・クライアントのサーバーとなる Windows 2000 マシンに対する、シン・クライアントのインストール・セットアップに固有の手順です。シン・ワークステーション環境をセットアップするには、以下のタスクを実行します。

1. コード・サーバーとなるマシン上に DB2 Administration Client または DB2 Connect Personal Edition をインストールします。
2. コード・サーバー上にクロスプラットフォーム・サポートをセットアップします。
3. コード・ディレクトリーをすべてのシン・ワークステーションから使用できるようにします。
4. シン・クライアント応答ファイルを作成します。
5. シン・クライアントのネットワーク・ドライブをコード・サーバーにマップします。
6. シン・クライアントを使用可能にします。

関連概念:

- 64 ページの『シン・クライアントに関する考慮事項 (Windows)』
- 61 ページの『シン・クライアント (Windows)』
- 61 ページの『シン・クライアント環境 (Windows)』

関連タスク:

- 68 ページの『コード・サーバーでの DB2 Administration Client または DB2 Connect Personal Edition のインストール (Windows)』
- 68 ページの『コード・サーバーでのクロスプラットフォーム・サポートのセットアップ (Windows)』
- 71 ページの『すべてのシン・ワークステーションに対してコード・ディレクトリーを使用可能にする (Windows)』
- 72 ページの『シン・クライアント応答ファイルの作成 (Windows)』
- 73 ページの『シン・クライアントのネットワーク・ドライブをコード・サーバーにマップする (Windows)』
- 74 ページの『thnsetup コマンドを実行してシン・クライアントを使用可能にする (Windows)』

コード・サーバーでの DB2 Administration Client または DB2 Connect Personal Edition のインストール (Windows)

コード・サーバーでの DB2 Administration Client または DB2 Connect Personal Edition のインストールは、シン・クライアント環境のセットアップの一部です。DB2 シン・クライアント・ワークステーションでは、DB2 シン・クライアント・コード・サーバーからコードをロードすることだけが可能です。また DB2 Connect シン・ワークステーションでは、DB2 Connect シン・コード・サーバーからコードをロードすることだけが可能です。

手順:

コード・サーバーに DB2 Administration Client または DB2 Connect Personal Edition をインストールするには、以下のタスクを実行します。

1. インストール・ウィザードで「**カスタム (Custom)**」を選択します。
2. 「コンポーネントの選択 (Select Components)」ウィンドウで、「**シン・クライアント・コード・サーバー (Thin Client Code Server)**」コンポーネントを選択して、シン・クライアントのセットアップに必要なファイルをインストールします。

次のステップは、コード・サーバーでのクロスプラットフォーム・サポートのセットアップです。

ご使用の DB2 製品が、ローカル・コンピューターまたはネットワーク内の別のコンピューター上にある DB2 資料にアクセスするようにしたい場合には、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければなりません。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database および DB2 関連製品に関する資料が含まれています。

関連概念:

- 80 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 68 ページの『コード・サーバーでのクロスプラットフォーム・サポートのセットアップ (Windows)』
- 87 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

コード・サーバーでのクロスプラットフォーム・サポートのセットアップ (Windows)

コード・サーバーでのクロスプラットフォーム・サポートのセットアップは、シン・クライアント環境のセットアップ作業の一部です。実際の環境で Windows 98、Windows 2000、Windows NT、Windows ME、Windows XP、および Windows Server 2003 の混在をサポートする予定がない場合は、このステップを省略できます。

前提条件:

シン・クライアント環境では、サーバー側とシン・クライアント側でさまざまな Windows 32 ビット・オペレーティング・システムをサポートすることになる可能性があります。しかし、最初にインストール・ディレクトリーを手動でコピーするのでない限り、単一のコード・サーバーから、異なる複数のオペレーティング・システム上に存在するシン・クライアントを処理することはできません。Windows 32 ビット・マシン上のコード・サーバーでサポートできるのは、シン・クライアントの下記の組み合わせのうちのいずれかだけです。

1. Windows 98 と、Windows ME または、そのいずれか。または
2. Windows 2000、Windows XP、Windows Server 2003 と、Windows NT または、そのいずれか。

たとえば、Windows NT マシン上のコード・サーバーでは、Windows 98 と Windows ME のシン・クライアントを両方とも処理できます。しかし、その同じコード・サーバーで、同時に Windows 2000、Windows XP、Windows Server 2003、または Windows NT のシン・クライアントをサポートすることはできません。逆に、その Windows NT コード・サーバーで Windows 2000 と Windows NT のシン・クライアントをサポートすることにした場合は、その環境で同時に Windows 98 シン・クライアントをサポートすることはできません。

重要: Windows NT または Windows 2000 マシンにアクセスする Windows 98 シン・クライアントにログオンする場合、そのユーザー・アカウントは、その Windows NT か Windows 2000 マシン上でローカルに定義されていなければなりません。Windows 98 シン・クライアントのユーザー・アカウントが jsmith なら、Windows のユーザー・マネージャー・ユーティリティーを使用して、jsmith のローカル・ユーザー・アカウントを作成する必要があります。ローカル・ユーザー・アカウントの作成については、Windows オペレーティングのヘルプを参照してください。

構成環境に複数の異なる Windows 32 ビット・オペレーティング・システムが含まれている場合には、以下のタスクを実行して、コード・サーバーをセットアップする必要があります。下記の例は、Windows NT コード・サーバーが Windows 98 シン・クライアントに対してサーバーとなるように構成する場合です。しかし、すべての Windows 32 ビット・オペレーティング・システムの組み合わせについて、同じ手順が当てはまります。

手順:

コード・サーバー上でクロスプラットフォーム・サポートをセットアップするには、以下のタスクを実行します。

注: ここでは、DB2 を `c:\sql1lib` にインストールし、Windows 98 クライアントのためのサーバー・ディレクトリーは `d:\sql1lib98` であるとしています。

1. Windows NT マシン上で下記のコマンドを入力して、Windows 98 ワークステーションの処理のために使用するディレクトリーを作成します。

```
md d:\sql1lib98
```

ここで、

- `d:` は、ローカル・ハード・ディスク・ドライブです。

2. 次のコマンドを入力して、前のステップで作成したディレクトリーに、コード・サーバー上の DB2 製品ディレクトリー (たとえば `c:\sql11ib`) をコピーします。

```
xcopy c:\sql11ib\*. * d:\sql11ib98 /s /e
```

ここで、

- `c:` は、DB2 製品をインストールしたコード・サーバー上のドライブを表します。
 - `d:` は、直前のステップで、`sql11ib98` ディレクトリーを作成したコード・サーバー上のドライブを表します。
3. コード・サーバーにおいて、最初のステップで作成したディレクトリーに移動します。これは、コード・サーバーで Windows 98 のシン・ワークステーションのために使用するディレクトリーです。ここでは、下記のコマンドを入力します。

```
d:  
cd sql11ib98
```

4. 次のコマンドを入力して、コード・サーバーでクロスプラットフォーム・シン・ワークステーションを処理できるようにしてください。

```
bin\db2thn9x.bat target_platform
```

ここで、

- `target_platform` は、このディレクトリーがサポートするプラットフォームです。この例では、プラットフォームの値は `98` です。シン・ワークステーションで Windows NT または Windows 2000 が実行されている場合は、`nt` パラメーターを使用します。

これで、マシン上に 2 つのコード・サーバーが作成されました (1 つは `c:\sql11ib`、もう 1 つは `d:\sql11ib98` に作成)。この例では、Windows 98 ワークステーション上にシン・クライアントを作成し、Windows NT マシンがコード・サーバーであるとしているので、これ以降のステップでは Windows 98 用コード・サーバー (たとえば `d:\sql11ib98`) を使用する必要があります。

次のステップは、すべてのシン・ワークステーションからコード・ディレクトリーを利用できるようにすることです。

関連タスク:

- 68 ページの『コード・サーバーでの DB2 Administration Client または DB2 Connect Personal Edition のインストール (Windows)』
- 71 ページの『すべてのシン・ワークステーションに対してコード・ディレクトリーを使用可能にする (Windows)』

すべてのシン・ワークステーションに対してコード・ディレクトリーを使用可能にする (Windows)

すべてのシン・ワークステーションからコード・ディレクトリーを利用できるようにする作業は、シン・クライアント環境のセットアップ作業の一部です。必要なコードをコード・サーバーからロードするには、各ターゲット・シン・ワークステーションごとに、DB2 クライアントまたは DB2 Connect Personal Edition (PE) のソース・コードのインストール先ディレクトリーが読み取り可能でなければなりません。

コード・サーバーのディレクトリー共用のために必要な手順は、Windows 98 または Windows NT と Windows 2000 では異なっています。

手順:

コード・ディレクトリーをすべてのシン・ワークステーションから (読み取りモード) 利用できるようにするには、以下のタスクを実行します。

1. Windows NT コード・サーバーの場合、「**Windows エクスプローラ**」を起動します。
2. コード・サーバーで、Windows 98 のシン・ワークステーションのために使用するディレクトリーを選択します。たとえば、d:\sql1lib98 ディレクトリーを共有するよう選択します。
3. メニュー・バーから「ファイル」→「プロパティ」を選択します。
4. 「共有」タブをクリックします。
5. 「このフォルダを共有する」ラジオ・ボタンを選択します。
6. 「共有名」フィールドに、8 文字以下の共有名を入力します。たとえば、NTCODESV と入力します。
7. すべてのシン・クライアント・ユーザーが、このディレクトリーに対する読み取りアクセスを持っている必要があります。たとえば、ユーザー jsmith がシン・クライアント・マシンにログオンして、コード・サーバー上のシン・クライアント・コードにアクセスする際に、このディレクトリーにアクセスが必要になります。以下のタスクを実行して、そのための読み取りアクセスを指定します。
 - a. 「アクセス許可」をクリックします。「共用許可によるアクセス (Access Through Share Permissions)」ウィンドウがオープンします。
 - b. 「名前」ボックスで、「**Everyone**」を選択します。

注: Everyone グループか、シン・クライアント・ユーザーのために特別に定義したグループか、またはシン・クライアントの個々のユーザーにアクセス権を付与できます。
 - c. 「アクセスのタイプ (Type of Access)」ドロップダウン・ボックスをクリックし、「読み取り (Read)」を選択します。
 - d. 「OK」を何回かクリックして、すべてのウィンドウをクローズします。

次のステップは、シン・クライアント応答ファイルの作成です。

関連概念:

- 64 ページの『シン・クライアントに関する考慮事項 (Windows)』

関連タスク:

- 72 ページの『シン・クライアント応答ファイルの作成 (Windows)』
- 68 ページの『コード・サーバーでのクロスプラットフォーム・サポートのセットアップ (Windows)』

シン・クライアント応答ファイルの作成 (Windows)

応答ファイルは ASCII ファイルですが、セットアップと構成データを使用してこれをカスタマイズし、インストールを自動化することができます。コード・サーバーのインストール時には、対話式のインストールを実行します。このようなインストールでは、セットアップ・プログラムから出されるプロンプトに手動で応答しなければ製品をインストールできません。この応答によって、DB2 製品のインストールや環境の構成に必要な情報が提供されます。この情報は、キーワードと値という形式で応答ファイルに入力されます。

応答ファイルには、インストール、レジストリー値、環境変数の設定値、およびデータベース・マネージャー構成パラメーターの設定値にユニークなキーワードが含まれています。

手順:

シン・クライアント・インストールの応答ファイルを作成するには、次の方式があります。

- **db2rspgn** コマンドを使用して、既存のクライアント・セットアップに基づいた応答ファイルを作成できます。
 1. 該当するレジストリー値、環境変数、データベース・マネージャー構成、およびデータベース接続をすべて指定して、DB2 シン・クライアントをセットアップします。
 2. **db2rspgn** コマンドを実行して、応答ファイルを作成し、応答ファイルのインストール設定をすべて複製します。
- サンプル応答ファイル `db2thin.rsp` をカスタマイズできます。このサンプル応答ファイルは、`c:\%sqllib%\thinsetup` ディレクトリーにあります (`c:` はシン・クライアント・コード・サーバーのインストール先ドライブ)。

応答ファイルにおいて、アスタリスク (*) は注釈のような役割を果たします。先頭にアスタリスクが置かれた行は、インストール時には無視されます。パラメーターを使用可能にするには、アスタリスクを取り除きます。キーワードを指定しなかった場合や、コメント化されている場合は、デフォルト値が使用されます。

たとえば、ODBC サポートをインストールする場合、応答ファイルの中でのこのキーワードの項目は、デフォルトで次のようになっています。

```
*COMP =ODBC_SUPPORT
```

このコンポーネントをインストールするには、次のようにこの行からアスタリスクを削除します。

```
COMP =ODBC_SUPPORT
```

キーワードの中には、値を設定することが必要なものがあります。それらのキーワードを有効にするには、アスタリスクを削除します。しかし、等号の右辺の内容は、そのパラメーターに対して実際に使用する値に置き換えることが必要です。

たとえば、

```
*DB2.DIAGLEVEL = 0 - 4
```

このキーワードのパラメーターを 4 に変更したい場合は、次のようにします。

```
DB2.DIAGLEVEL = 4
```

応答ファイルの編集が終わったら、それを別の名前で保存して、元のサンプルを元のまま残すようにしてください。たとえば、編集後のファイルを `test.rsp` という名前にし、それを前のステップで共有アクセス権をセットアップしたのと同じディレクトリー (`d:\sql11b98`) に保存します。

これで、この応答ファイルと **thnsetup** コマンドを使用して、ネットワークを通じて DB2 シン・クライアントを配置できます。

関連タスク:

- 71 ページの『すべてのシン・ワークステーションに対してコード・ディレクトリーを使用可能にする (Windows)』
- 73 ページの『シン・クライアントのネットワーク・ドライブをコード・サーバーにマップする (Windows)』

シン・クライアントのネットワーク・ドライブをコード・サーバーにマップする (Windows)

シン・クライアントのネットワーク・ドライブをコード・サーバーにマップする作業は、シン・クライアント環境のセットアップ作業の一部です。

前提条件:

コード・サーバーへの共有ディレクトリー・アクセスを所持している有効なユーザーとして、ワークステーションにログオンしなければなりません。コード・サーバーにはローカルに定義されたユーザー・アカウントが作成されているので、コード・サーバーへのアクセス権は付与されています。

手順:

シン・クライアントのネットワーク・ドライブをマップすることにより、コード・サーバー上に作成した共有ディレクトリー下の **thnsetup** ディレクトリーにアクセスできるようにするには、以下のタスクを実行します。

1. Windows エクスプローラーを起動します。
2. 「ツール」メニューから、「ネットワークドライブの割り当て」を選択します。
3. 「ドライブ」ドロップダウン・リストで、コード・サーバーのアクセス先として割り当てたいドライブを選択します。
4. Windows 98 または Windows NT で、「パス」フィールドに下記のように共有位置を指定します。

¥computer_name¥share_name

ここで、

computer_name

コード・サーバーのコンピューター名。

share_name

コード・サーバー上の共有ディレクトリーの共有名。

5. 「ログオン時に再接続」チェック・ボックスを選択して、共用を永続的なものとしてします。

次のステップは、シン・クライアントの使用可能化です。

関連タスク:

- 72 ページの『シン・クライアント応答ファイルの作成 (Windows)』
- 74 ページの『thnsetup コマンドを実行してシン・クライアントを使用可能にする (Windows)』

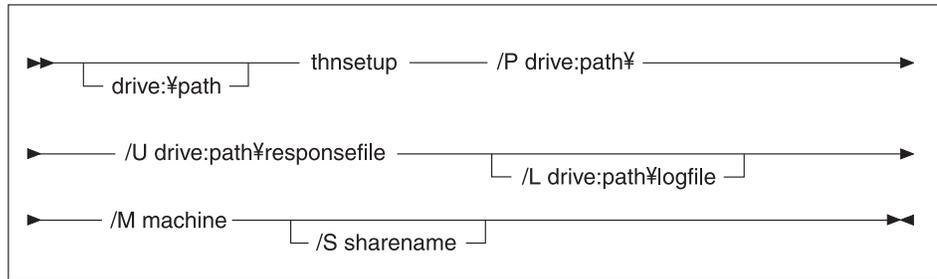
thnsetup コマンドを実行してシン・クライアントを使用可能にする (Windows)

thnsetup コマンドを実行してシン・クライアントを使用可能にする作業は、シン・クライアント環境のセットアップ作業の一部です。

手順:

thnsetup コマンドを使用してシン・クライアントを使用可能にするには、以下のタスクを実行します。

1. シン・クライアント・ワークステーションから **thnsetup** コマンドを実行します。このコマンドを実行すると、DB2 シン・クライアントまたは DB2 Connect シン・ワークステーションがセットアップされ、コード・サーバーへの必要なリンクが確立されます。 **thnsetup** コマンドには、以下のパラメーターを指定できます。



ここで、

- /P** DB2 コードをインストールしたコード・サーバー上のパスを指定します。このパラメーターは必須です。永続ネットワーク・ドライブをまだコード・サーバーに割り当てていない場合は、このパラメーターをドライブ文字にする必要があります。このドライブ文字が、その後ネットワーク・ドライブを表すために使用されます。
- /U** 完全修飾応答ファイル名。このパラメーターは必須です。
- /L** 完全修飾ログ・ファイル名。ここでは、セットアップ情報やセットアップ中に起きたエラーが記録されます。ログ・ファイル名を指定しないデフォルトの `db2.log` というファイル名が使用されます。このファイルは、オペレーティング・システムがインストールされているドライブの `db2log` というディレクトリーに作成されます。このパラメーターはオプションです。
- /M** コード・サーバーのコンピューター名。このパラメーターは必須です。
- /S** DB2 製品がインストールされているコード・サーバーの共有名。このパラメーターを指定する必要があるのは、永続ネットワーク・ドライブを割り当てなかった場合だけです。

たとえば、下記のようなシン・ワークステーション・ワークステーションを作成するには、

- コード・サーバー上の共有名が `NTCODESV` の共有ディレクトリーを、ローカル・ドライブ `x:` にマップします。
- 応答ファイルは `test.rsp`。
- その応答ファイルは、コード・サーバーと同じディレクトリーにあります。

シン・ワークステーションの DOS プロンプトに下記のコマンドを入力します。

```
x:%thnsetup%thnsetup /P x: /U x:%thnsetup%test.rsp /M machineName
```

thnsetup コマンドが完了したら、ログ・ファイル (`y :%db2log` ディレクトリーの `db2.log`、`y` は DB2 のインストール先ドライブ) のメッセージをチェックしてください。

ログ・ファイルに含まれるエラー・メッセージは、インストール試行中に発生したエラーに応じて異なります。ログ・ファイルには、エラーの理由、またセットアップが完了しなかったことを示すメッセージが入れられます。

関連タスク:

- 72 ページの『シン・クライアント応答ファイルの作成 (Windows)』

- 73 ページの『シン・クライアントのネットワーク・ドライブをコード・サーバーにマップする (Windows)』

第 4 部 付録

付録 A. DB2 Universal Database の技術情報

DB2 資料とヘルプ

DB2[®] 技術情報は、以下のツールと方法を介して利用できます。

- DB2 インフォメーション・センター
 - トピック
 - DB2 ツールのヘルプ
 - サンプル・プログラム
 - チュートリアル
- ダウンロード可能な PDF ファイル、CD 上の PDF ファイル、および印刷された資料
 - ガイド
 - リファレンス・マニュアル
- コマンド行ヘルプ
 - コマンド・ヘルプ
 - メッセージ・ヘルプ
 - SQL 状態ヘルプ
- インストール済みソース・コード
 - サンプル・プログラム

ibm.com[®] にある技術資料、白書、Redbooks[™] その他の DB2 Universal Database[™] 技術情報にオンラインでアクセスできます。DB2 Information Management ソフトウェア・ライブラリー・サイト (www.ibm.com/software/data/pubs/) にアクセスしてください。

DB2 資料の更新

IBM[®] は、DB2 インフォメーション・センターの資料のフィックスパックやその他の資料更新を定期的に発行しています。DB2 インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にアクセスすれば、常に最新の情報が掲載されます。DB2 インフォメーション・センターをローカル・インストールしている場合、更新記事を表示するには、まず手動で更新をインストールしてください。新しい情報が発表されたときに資料を更新することにより、DB2 インフォメーション・センター CD からインストールした情報を更新することができます。

インフォメーション・センターの方が、PDF 資料やハードコピー資料よりも頻繁に更新されます。DB2 の最新の技術情報を入手するには、資料更新が発行されたときにそれをインストールするか、または www.ibm.com サイトの DB2 インフォメーション・センターにアクセスしてください。

関連概念:

- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『CLI サンプル・プログラム』

- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『Java サンプル・プログラム』
- 80 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 101 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 91 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 102 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 102 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 103 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 93 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 インフォメーション・センター

DB2[®] インフォメーション・センターを使用すると、DB2 Universal Database[™]、DB2 Connect[™]、DB2 Information Integrator および DB2 Query Patroller[™] などの DB2 ファミリー製品を最大限に活用するのに必要なすべての情報にアクセスできます。また、DB2 インフォメーション・センターは、DB2 の主な機能とコンポーネントに関する情報を提供します (レプリケーション、データウェアハウジング、および DB2 の種々の Extender など)。

Mozilla 1.0 以上または Microsoft[®] Internet Explorer 5.5 以上で表示する場合、DB2 インフォメーション・センターには以下の機能があります。以下のいくつかの機能では、JavaScript[™] のサポートを使用可能にする必要があります:

柔軟なインストール・オプション

以下の中から、ご使用の環境に最も適したオプションを使って DB2 資料を表示できます。

- 最新の資料を常に自動的に利用できるようにするには、IBM[®] の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターからすべての資料に直接アクセスします。
- 更新処理を最小化し、イントラネット内のネットワーク・トラフィックだけに制限するには、イントラネット上の 1 つのサーバーに DB2 資料をインストールします。
- 柔軟性を改善し、ネットワーク接続への依存を軽減するには、個々のコンピューターに DB2 資料をインストールします。

検索 「検索」テキスト・フィールドに検索語を入力することにより、DB2 インフォメーション・センターのすべてのトピックを検索できます。複数の語句を引用符で囲めば、完全一致を検索できます。また、ワイルドカード演算子 (*、?) とブール演算子 (AND、NOT、OR) を使用して検索を絞り込むことができます。

タスク指向の目次

単一の目次の中から、DB2 資料のトピックを見付けることができます。目

次は、主に実行するタスクの種類に従って編成されていますが、そのほかに製品概要、特定のゴール (目的) の情報、参照情報、索引、および用語集も含まれます。

- 製品概要では、DB2 ファミリーで使用可能な製品間の関係、そうした各製品で提供される機能、および各製品の最新リリース情報について説明されています。
- インストール、管理および開発などのゴール・カテゴリには、タスクを迅速に完了し、そのための背景情報をよく理解できるようにするトピックが含まれています。
- 「参照」トピックでは、その対象に関する詳細な情報 (ステートメントとコマンドの構文、メッセージ・ヘルプ、構成パラメーターなど) が説明されています。

現在のトピックを目次に表示する

現在のトピックが目次のどの部分に該当するかを表示するには、目次フレーム内の「リフレッシュ/現在のトピックの表示 (Refresh/Show Current Topic)」ボタンをクリックするか、コンテンツ・フレーム内の「目次に表示 (Show in Table of Contents)」ボタンをクリックします。幾つかのファイルで関連トピックへの複数のリンクをたどった場合、または検索結果からトピックにアクセスした場合には、この機能が役立ちます。

索引 索引から、すべての資料にアクセスすることができます。索引では、用語が 50 音順に編成されています。

用語集 用語集を見れば、DB2 資料で使われているさまざまな用語の定義を調べることができます。用語集では、用語が 50 音順に編成されています。

組み込まれているローカライズ情報

DB2 インフォメーション・センターは、ブラウザで設定された言語でトピックを表示します。設定された言語のトピックが利用できない場合、DB2 インフォメーション・センターにはそのトピックの英語版が表示されます。

iSeries™ 技術情報については、IBM eServer™ iSeries Information Center (www.ibm.com/eserver/series/infocenter/) を参照してください。

関連概念:

- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 91 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 92 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおける特定の言語でのトピックの表示』
- 90 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 84 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 87 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ

さまざまに異なる業務環境のもとでは、DB2[®] 情報にどのようにアクセスするかの要件もそれぞれ異なります。DB2 インフォメーション・センターにアクセスするには、IBM[®] の Web サイト、サーバーまたは組織のネットワーク、あるいはコンピューターへのインストールという 3 つの方法が可能です。この 3 つのケースのいずれも、資料は DB2 インフォメーション・センター内に置かれます。インフォメーション・センターは、ブラウザを使って表示できるように設計されたトピック・ベースの情報の Web サイトです。デフォルトでは、DB2 製品から、IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。これに対して、イントラネット・サーバーまたはご自分のコンピューターから DB2 インフォメーション・センターにアクセスしたい場合、製品メディア・パック内にある DB2 インフォメーション・センター CD から DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。以下では、DB2 資料へのアクセス・オプションの要約、および 3 つのインストール・シナリオを示します。これを参考にして、お客様の業務環境で DB2 インフォメーション・センターにアクセスするにはどの方法が最適か、どのようなインストール上の問題に配慮する必要があるかを判別してください。

DB2 資料にアクセスするオプションの要約:

以下の表は、お客様の実際の業務環境で、DB2 インフォメーション・センターの DB2 製品情報にアクセスする方法としてどんなオプションが推奨されるかを示します。

| インターネット・アクセス | イントラネット・アクセス | 推奨されるアクション |
|--------------|--------------|---|
| はい | はい | IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス、またはイントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターへのアクセス |
| はい | いいえ | IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス |
| いいえ | はい | イントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターへのアクセス |
| いいえ | いいえ | ローカル・コンピューター上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス |

シナリオ: コンピューター上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス:

Tsu-Chen 氏は小さな町で工場を経営していますが、その町には、インターネット・アクセスを提供する地元のインターネット・サービス・プロバイダーがありません。彼は、在庫、製品オーダー、銀行口座情報、および営業経費を管理するために DB2 Universal Database™ を購入しました。Tsu-Chen 氏は以前に DB2 製品を利用したことがないので、DB2 の使用方法を習得するために、DB2 製品資料を参照する必要があります。

Tsu-Chen 氏は 標準インストール・オプションを使って DB2 Universal Database を自分のコンピューターにインストールした後、DB2 資料にアクセスしようとしてみず。しかし、開こうとしているページが見つからないというエラー・メッセージがブラウザから通知されました。Tsu-Chen 氏は DB2 製品のインストール・マニュアルを調べた結果、DB2 資料を自分のコンピューター上で利用するには、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければならないことに気がきます。そしてメディア・パックの中にあった DB2 インフォメーション・センター CD を見つけ出して、インストールしました。

これで、Tsu-Chen 氏はオペレーティング・システムのアプリケーション・ランチャーから DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるようになり、より良い業務成果をあげるために DB2 製品を利用する方法を習得できます。

シナリオ: IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス:

Colin は、あるセミナー企業に所属する情報技術コンサルタントです。彼の専門はデータベース・テクノロジーおよび SQL で、DB2 Universal Database を使って北米一帯の企業を対象にこれらの科目のセミナーを開催しています。Colin のセミナーでは、教材として DB2 資料も使用されます。たとえば、SQL の講習コースでは、データベース照会の基本構文と拡張構文を教えるために SQL に関する DB2 資料が使用されます。

Colin が教えている企業の大半はインターネット・アクセスを配備しています。このような状況から判断して、Colin は、最新バージョンの DB2 Universal Database を自分のモバイル・コンピューターにインストールしたとき、IBM Web サイト上の DB2 インフォメーション・センターにアクセスするよう構成しました。この構成によって、Colin はセミナーで教えるときに最新の DB2 資料にオンライン・アクセスすることができます。

しかし、時折、Colin は移動中にインターネット・アクセスを利用できないことがあります。これは問題となります。担任するセミナーの準備のために DB2 資料にアクセスする必要がある場合には、とくにそうです。このような事態が起きないようにするために、Colin は自分のモバイル・コンピューターに DB2 インフォメーション・センターのコピーをインストールしました。

こうして、Colin は常に DB2 資料のコピーを自在に活用できるようになりました。**db2set** コマンドを使って自分のモバイル・コンピューターのレジストリー変数を簡単に構成し、どこにいるかに応じて、IBM Web サイトまたは自分のモバイル・コンピューターから DB2 インフォメーション・センターにアクセスできます。

シナリオ: イン트라ネット・サーバー上の DB2 インフォメーション・センターへのアクセス:

Eva は、生命保険会社のデータベース上級管理者です。彼女は管理業務の一環として、会社の UNIX[®] データベース・サーバーに最新バージョンの DB2 Universal Database をインストールおよび構成します。彼女の会社は最近、セキュリティ上の理由から、インターネット・アクセスをもはや業務で利用できないようにすると社員に通知しました。同社はネットワーク環境を装備しているため、Eva は DB2 インフォメーション・センターのコピーをイントラネット・サーバー上にインストール

ールして、社内のデータウェアハウスを定期的に利用するすべての社員（営業担当者、営業部長、および業務分析担当者）から DB2 資料へのアクセスを可能にすることにしました。

Eva は、応答ファイルを使って全社員のコンピューター上に最新バージョンの DB2 Universal Database をインストールするようデータベース・チームに指示します。その際、イントラネット・サーバーのホスト名とポート番号を使って DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるよう、確実に各コンピューターを構成します。

しかし、Eva のチームの下級データベース管理者である Migual の誤解によって、数人の社員のコンピューター上で、イントラネット・サーバーの DB2 インフォメーション・センターにアクセスするよう DB2 Universal Database を構成する代わりに、DB2 インフォメーション・センターのコピーをそれらのコンピューターにインストールしてしまいました。これを訂正するために、Eva は、**db2set** コマンドを使ってこれらのコンピューター上の DB2 インフォメーション・センターのレジストリー変数（ホスト名は DB2_DOCHOST、ポート番号は DB2_DOCPORT）を変更するよう Migual に指示しました。これで、ネットワーク上の適切なすべてのコンピューターが DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるようになり、社員は DB2 に関する質問の答えを DB2 資料から見つけることができます。

関連概念:

- 80 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 91 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 84 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 87 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセスのロケーションの設定: Common GUI help』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)

DB2 製品資料にアクセスする方法として、IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、またはコンピューターにインストールしたバージョンの 3 つがあります。デフォルトでは、DB2 製品は IBM Web サイト上の DB2 資料にアクセスします。イントラネット・サーバーまたはコンピューター上の DB2 資料にアクセスしたい場合には、DB2 インフォメーション・センター CD から資料をインストールする必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用すれば、インストール設

定を定義し、UNIX オペレーティング・システムを使用するコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールできます。

前提条件:

このセクションでは、UNIX コンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールするためのハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の諸要件を一覧で示します。

• ハードウェア要件

以下のいずれかのプロセッサが必要です。

- PowerPC (AIX)
- HP 9000 (HP-UX)
- Intel 32 ビット (Linux)
- Solaris UltraSPARC コンピューター (Solaris オペレーティング環境)

• オペレーティング・システム要件

以下のいずれかのオペレーティング・システムが必要です。

- IBM AIX 5.1 (PowerPC 上)
- HP-UX 11i (HP 9000 上)
- Red Hat Linux 8.0 (Intel 32 ビット上)
- SuSE Linux 8.1 (Intel 32 ビット上)
- Sun Solaris バージョン 8 (Solaris オペレーティング環境の UltraSPARC コンピューター上)

注: DB2 インフォメーション・センターは、DB2 クライアントをサポートする UNIX オペレーティング・システム上で稼動します。このため、IBM Web サイトから DB2 インフォメーション・センターにアクセスするか、イントラネット・サーバーに DB2 インフォメーション・センターをインストールしてそれにアクセスすることをお勧めします。

• ソフトウェア要件

- 以下のブラウザがサポートされています。

- Mozilla バージョン 1.0 以上

• DB2 セットアップ・ウィザードは、グラフィック・インストーラーです。ご使用のマシンで DB2 セットアップ・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェイスを表示可能にする X Window システム・ソフトウェアをインプリメントする必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを実行する前に、ディスプレイを正しくエクスポートしたことを確認してください。たとえば、コマンド・プロンプトで

```
export DISPLAY=9.26.163.144:0.
```

というコマンドを入力します。

• 通信要件

- TCP/IP

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、以下のようにします。

1. システムにログオンします。
2. DB2 インフォメーション・センター製品 CD を挿入してシステムにマウントします。
3. 次のコマンドを入力して、CD がマウントされているディレクトリーに移動します。

```
cd /cd
```

`/cd` は、CD のマウント・ポイントを表します。

4. **`/db2setup`** コマンドを入力して、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。
5. IBM DB2 セットアップ・ランチパッドが開きます。DB2 インフォメーション・センターのインストールに直接進むには、「製品のインストール」をクリックします。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ」をクリックします。「キャンセル」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。
6. 「インストールしたい製品を選択します」ページでは、「次へ」をクリックします。
7. 「DB2 セットアップ・ウィザードによるこそ (Welcome to the DB2 Setup wizard)」ページで、「次へ」をクリックします。DB2 セットアップ・ウィザードは、プログラムのセットアップ操作を案内します。
8. インストールを続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。「ご使用条件」ページで、「ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)」をクリックして、「次へ」をクリックします。
9. 「インストール・アクションの選択」で、「このコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールする (Install DB2 Information Center on this computer)」を選択します。応答ファイルを使用して、このコンピューターまたは他のコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをあとでインストールしたい場合には、「設定を応答ファイルに保管する」を選択します。「次へ」をクリックします。
10. 「インストールする言語の選択」ページでは、DB2 インフォメーション・センターをインストールする言語を選択します。「次へ」をクリックします。
11. 「DB2 インフォメーション・センター・ポートの指定」ページでは、DB2 インフォメーション・センターへの着信通信を構成します。「次へ」をクリックしてインストールを続けます。
12. 「ファイルのコピーの開始」ページでは、インストールの選択項目を確認します。設定を変更するには、「戻る」をクリックします。「インストール」をクリックすると、DB2 インフォメーション・センターのファイルがコンピューターにコピーされます。

このほか、応答ファイルを使って DB2 インフォメーション・センターをインストールすることもできます。

インストール・ログ db2setup.his、 db2setup.log、および db2setup.err は、デフォルトでは /tmp ディレクトリーに置かれます。

db2setup.log ファイルは、エラーも含めた DB2 製品のインストール情報をすべてキャプチャーします。 db2setup.his ファイルは、コンピューター上の DB2 製品インストール内容をすべて記録します。 DB2 は、db2setup.log ファイルを db2setup.his に付加します。 db2setup.err ファイルは、Java から戻されるすべてのエラー出力 (例外やトラップの情報など) をキャプチャーします。

インストールが完了したら、ご使用の UNIX オペレーティング・システムに応じて、DB2 は以下のいずれかのディレクトリーにインストールされます。

- AIX: /usr/opt/db2_08_01
- HP-UX: /opt/IBM/db2/V8.1
- Linux: /opt/IBM/db2/V8.1
- Solaris オペレーティング環境: /opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 80 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX)』
- 91 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 92 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおける特定の言語でのトピックの表示』
- 90 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 87 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)

DB2 製品資料にアクセスする方法として、IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、またはコンピューターにインストールしたバージョンの 3 つがあります。デフォルトでは、DB2 製品は IBM Web サイト上の DB2 資料にアクセスします。イントラネット・サーバーまたはコンピューター上の DB2 資料にアクセスしたい場合には、DB2 インフォメーション・センター CD から DB2 資料をインストールする必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用すれば、インストール設定を定義し、Windows オペレーティング・システムを使用するコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールできます。

前提条件:

このセクションでは、Windows に DB2 インフォメーション・センターをインストールするためのハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の諸要件を一覧で示します。

• ハードウェア要件

以下のいずれかのプロセッサが必要です。

- 32 ビット・コンピューター: Pentium または Pentium 互換の CPU

• オペレーティング・システム要件

以下のいずれかのオペレーティング・システムが必要です。

- Windows 2000
- Windows XP

注: DB2 インフォメーション・センターは、DB2 クライアントをサポートする Windows オペレーティング・システム上で稼動します。このため、IBM Web サイトの DB2 インフォメーション・センターにアクセスするか、イントラネット・サーバーに DB2 インフォメーション・センターをインストールしてそれにアクセスすることをお勧めします。

• ソフトウェア要件

- 以下のブラウザがサポートされています。

- Mozilla 1.0 以上
- Internet Explorer バージョン 5.5 または 6.0 (Windows XP の場合はバージョン 6.0)

• 通信要件

- TCP/IP

制約事項:

- DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、管理権限をもつアカウントが必要です。

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、以下のようになります。

1. DB2 インフォメーション・センターのインストールで定義したアカウントで、システムにログオンします。
2. CD をドライブに挿入します。自動実行機能が使用可能になっていれば、IBM DB2 セットアップ・ランチパッドが起動します。
3. DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別して、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。英語以外の言語でセットアップ・プログラムを実行したい場合、またはセットアップ・プログラムの自動始動が失敗した場合には、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始できます。

次のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始します。

- a. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 「開く」フィールドで、以下のコマンドを入力します。

```
x:%setup.exe /i 2-letter language identifier
```

ここで、x: は CD ドライブ、2-letter language identifier (2 文字の言語識別子) はセットアップ・プログラムを実行する言語を表します。

c. 「OK」をクリックします。

4. IBM DB2 セットアップ・ランチパッドが開きます。DB2 インフォメーション・センターのインストールに直接進むには、「製品のインストール」をクリックします。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ」をクリックします。「キャンセル」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。
5. 「インストールしたい製品を選択します」ページでは、「次へ」をクリックします。
6. 「DB2 セットアップ・ウィザードによるこそ (Welcome to the DB2 Setup wizard)」ページで、「次へ」をクリックします。DB2 セットアップ・ウィザードは、プログラムのセットアップ操作を案内します。
7. インストールを続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。「ご使用条件」ページで、「ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)」をクリックして、「次へ」をクリックします。
8. 「インストール・アクションの選択」で、「このコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールする (Install DB2 Information Center on this computer)」を選択します。応答ファイルを使用して、このコンピューターまたは他のコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをあとでインストールしたい場合には、「設定を応答ファイルに保管する」を選択します。「次へ」をクリックします。
9. 「インストールする言語の選択」ページでは、DB2 インフォメーション・センターをインストールする言語を選択します。「次へ」をクリックします。
10. 「DB2 インフォメーション・センター・ポートの指定」ページでは、DB2 インフォメーション・センターへの着信通信を構成します。「次へ」をクリックしてインストールを続けます。
11. 「ファイルのコピーの開始」ページでは、インストールの選択項目を確認します。設定を変更するには、「戻る」をクリックします。「インストール」をクリックすると、DB2 インフォメーション・センターのファイルがコンピューターにコピーされます。

応答ファイルを使って DB2 インフォメーション・センターをインストールすることができます。また、**db2rspgn** コマンドを使って、既存のインストール内容に基づく応答ファイルを生成することもできます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、「マイ ドキュメント」¥DB2LOG¥ ディレクトリー内の db2.log ファイルと db2wi.log ファイルを参照してください。「マイ ドキュメント」ディレクトリーの場所は、ご使用のコンピューターの設定によって異なります。

db2wi.log ファイルは、DB2 の最新のインストール情報をキャプチャーします。db2.log は、DB2 製品のインストールの履歴をキャプチャーします。

関連概念:

- 80 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)』
- 91 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 92 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおける特定の言語でのトピックの表示』
- 90 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 84 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2rspgn - 応答ファイル生成プログラム・コマンド』

DB2 インフォメーション・センターの呼び出し

DB2 インフォメーション・センターは、Linux、UNIX、および Windows オペレーティング・システム用の DB2 製品 (DB2 Universal Database、 DB2 Connect、DB2 Information Integrator、 DB2 Query Patroller など) を使用するために必要なすべての情報を提供します。

DB2 インフォメーション・センターは、以下の場所から呼び出すことができます。

- DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューター
- DB2 インフォメーション・センターがインストールされているイントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューター
- IBM の Web サイト

前提条件:

DB2 インフォメーション・センターを呼び出すための要件は、以下のとおりです。

- オプション: 希望する言語でトピックを表示するようブラウザを構成する
- オプション: コンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを使用するよう DB2 クライアントを構成する

手順:

DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューターから DB2 インフォメーション・センターを呼び出すには、以下のようになります。

- (Windows オペレーティング・システムの) 「スタート」メニューから: 「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM DB2」 → 「情報」 → 「インフォメーション・センター」をクリックします。
- コマンド行プロンプトから:
 - Linux および UNIX オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs** コマンドを発行します。

- Windows オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs.exe** コマンドを発行します。

イントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューターにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようにします。

- Web ページ <http://<host-name>:<port-number>/> を開きます (<host-name> はホスト名、 <port-number> は DB2 インフォメーション・センターを利用可能なポート番号)。

IBM Web サイトにある DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようにします。

- Web ページ publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/ を開きます。

関連概念:

- 80 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 92 ページの『DB2 インフォメーション・センターにおける特定の言語でのトピックの表示』
- 101 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 91 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 102 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセスのロケーションの設定: Common GUI help』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『HELP コマンド』

コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/> から利用できる DB2 インフォメーション・センターは、資料の新規追加または変更によって定期的に更新されます。さらに、更新された DB2 インフォメーション・センターをコンピューターまたはイントラネット・サーバーにダウンロードしてインストールできる場合もあります。DB2 インフォメーション・センターを更新しても、DB2 クライアント製品またはサーバー製品は更新されません。

前提条件:

インターネットに接続されたコンピューターへのアクセスが必要です。

手順:

DB2 インフォメーション・センターの更新をコンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストールするには、以下のようにします。

1. IBM の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターを開きます。
2. 「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」 ページの見出し「サービスおよびサポート」の「ダウンロード」セクションで、「DB2 資料」リンクをクリックします。
3. 最新のドキュメンテーション・イメージのレベルと、インストール済みのドキュメンテーション・レベルを比較して、DB2 インフォメーション・センターを更新する必要があるかどうかを確認します。「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」 ページに、インストール済みのドキュメンテーションのレベルがリストされます。
4. より新しいバージョンの DB2 インフォメーション・センターが存在する場合、ご使用のオペレーティング・システムに対応する最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをダウンロードします。
5. 最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをインストールするには、Web ページの指示に従ってください。

関連概念:

- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 90 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 84 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 87 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 インフォメーション・センターにおける特定の言語でのトピックの表示

DB2 インフォメーション・センターでは、ブラウザの設定で指定した言語でのトピックの表示が試みられます。トピックがその指定言語に翻訳されていない場合は、DB2 インフォメーション・センターでは英語でトピックが表示されます。

手順:

Internet Explorer Web ブラウザーで、指定どおりの言語でトピックを表示するには、以下のようにします。

1. Internet Explorer の「ツール」→「インターネット オプション」→「言語...」 ボタンをクリックします。「言語の優先順位」ウィンドウがオープンします。
2. 該当する言語が、言語リストの先頭の項目に指定されていることを確認します。
 - リストに新しい言語を追加するには、「追加...」 ボタンをクリックします。

注: 言語を追加しても、特定の言語でトピックを表示するのに必要なフォントがコンピューターに備えられているとはかぎりません。

- リストの先頭に新しい言語を移動するには、その言語を選択してから、その言語が言語リストに先頭に行くまで「上へ」 ボタンをクリックします。

3. 使いたい言語で DB2 インフォメーション・センターを表示するには、ページをリフレッシュします。

Mozilla Web ブラウザーの場合に、使いたい言語でトピックを表示するには、以下のようになります。

1. Mozilla の「編集」→「設定」→「言語」ボタンをクリックします。「設定」ウィンドウに「言語」パネルが表示されます。
2. 該当する言語が、言語リストの先頭の項目に指定されていることを確認します。
 - リストに新しい言語を追加するには、「追加...」ボタンをクリックしてから、「言語を追加」ウィンドウで言語を選択します。
 - リストの先頭に新しい言語を移動するには、その言語を選択してから、その言語が言語リストに先頭に行くまで「上に移動」ボタンをクリックします。
3. 使いたい言語で DB2 インフォメーション・センターを表示するには、ページをリフレッシュします。

関連概念:

- 80 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

DB2 PDF 資料および印刷された資料

以下の表は、正式な資料名、資料番号、および PDF ファイル名を示しています。ハードコピー版の資料を注文するには、正式な資料名を知っておく必要があります。PDF ファイルを印刷するには、PDF ファイル名を知っておく必要があります。

DB2 資料は、以下のカテゴリーに分類されています。

- DB2 中核情報
- 管理情報
- アプリケーション開発情報
- ビジネス・インテリジェンス情報
- DB2 Connect 情報
- 入門情報
- チュートリアル情報
- オプション・コンポーネント情報
- リリース・ノート

以下の表は、DB2 ライブラリー内の各資料について、その資料のハードコピー版を注文したり、PDF 版を印刷または表示したりするのに必要な情報を示しています。DB2 ライブラリー内の各資料に関する詳細な説明については、www.ibm.com/shop/publications/order にある IBM Publications Center にアクセスしてください。

DB2 の基本情報

こうした資料の情報は、すべての DB2 ユーザーに基本的なもので、プログラマーおよびデータベース管理者にとって役立つ情報であるとともに、DB2 Connect、DB2 Warehouse Manager、または他の DB2 製品を使用するユーザーにとっても役

立つ内容です。

表 10. DB2 の基本情報

| 資料名 | 資料番号 | PDF ファイル名 |
|---|--------------------------|-----------|
| 「IBM DB2 Universal Database コマンド・リファレンス」 | SC88-9140 | db2n0j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database 用語集」 | 資料番号なし | db2t0j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 1 巻」 | GC88-9152 (ハードコピーな し) | db2m1j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 2 巻」 | GC88-9153 (ハードコピーな し) | db2m2j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database 新機能」 | SC88-9158 | db2q0j81 |

管理情報

これらの資料の情報は、DB2 データベース、データウェアハウス、およびフェデレーテッド・システムを効果的に設計し、インプリメントし、保守するために必要なトピックを扱っています。

表 11. 管理情報

| 資料名 | 資料番号 | PDF ファイル名 |
|--|-----------|-----------|
| 「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: プランニング」 | SC88-9135 | db2d1j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: インプリメンテー ション」 | SC88-9133 | db2d2j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: パフォーマンス」 | SC88-9134 | db2d3j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database 管理 API リファレンス」 | SC88-9136 | db2b0j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database データ移動ユーティリティー ガイドおよびリファレンス」 | SC88-9142 | db2dmj81 |
| 「IBM DB2 Universal Database データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンス」 | SC88-9143 | db2haj81 |
| 「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター 管理ガイド」 | SC88-9165 | db2ddj81 |
| 「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 1 巻」 | SC88-9155 | db2s1j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 2 巻」 | SC88-9156 | db2s2j81 |

表 11. 管理情報 (続き)

| 資料名 | 資料番号 | PDF ファイル名 |
|---|-----------|-----------|
| 「IBM DB2 Universal Database システム・モニター ガイドおよびリファレンス」 | SC88-9157 | db2f0j81 |

アプリケーション開発情報

これらの資料の情報は、DB2 Universal Database (DB2 UDB) のアプリケーション開発者またはプログラマーが特に興味を持つ内容です。サポートされるさまざまなプログラミング・インターフェース (組み込み SQL、ODBC、JDBC、SQLJ、CLI など) を使用して DB2 UDB にアクセスするのに必要な資料とともに、サポートされる言語およびコンパイラーについても紹介されています。また、DB2 インフォメーション・センターをご使用の場合には、サンプル・プログラムのソース・コードの HTML バージョンにアクセスすることもできます。

表 12. アプリケーション開発情報

| 資料名 | 資料番号 | PDF ファイル名 |
|---|-----------|-----------|
| 「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」 | SC88-9137 | db2axj81 |
| 「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーションのプログラミング」 | SC88-9138 | db2a1j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド サーバー・アプリケーションのプログラミング」 | SC88-9139 | db2a2j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」 | SC88-9159 | db211j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 2 巻」 | SC88-9160 | db212j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター アプリケーション統合ガイド」 | SC88-9166 | db2adj81 |
| 「IBM DB2 Universal Database XML Extender 管理およびプログラミングのガイド」 | SC88-9172 | db2sxj81 |

ビジネス・インテリジェンス情報

これらの資料の情報は、さまざまなコンポーネントを使用して、DB2 Universal Database のデータウェアハウジング機能および分析機能を拡張する方法を説明しています。

表 13. ビジネス・インテリジェンス情報

| 資料名 | 資料番号 | PDF ファイル名 |
|---|-----------|-------------|
| 「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インフォメーション・カタログ・センター 管理ガイド」 | SC88-9167 | db2dij81 |
| 「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インストール・ガイド」 | GC88-9164 | db2idj81 |
| 「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition DB2 Warehouse Manager を使用時の ETI ソリューション・コンバージョン・プログラムの管理」 | SC88-9894 | iwhe1mstx80 |

DB2 Connect 情報

このカテゴリの情報は、DB2 Connect Enterprise Edition または DB2 Connect Personal Edition を使用して、メインフレーム・サーバーおよびミッドレンジ・サーバー上のデータにアクセスする方法を説明しています。

表 14. DB2 Connect 情報

| 資料名 | 資料番号 | PDF ファイル名 |
|--|-----------|-----------|
| 「IBM コネクティビティ 補足」 | 資料番号なし | db2h1j81 |
| 「IBM DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」 | GC88-9145 | db2c6j81 |
| 「IBM DB2 Connect Personal Edition 概説およびインストール」 | GC88-9146 | db2c1j81 |
| 「IBM DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」 | SC88-9147 | db2c0j81 |

入門情報

このカテゴリの情報は、サーバー、クライアント、および他の DB2 製品をインストールして構成する場合に役立ちます。

表 15. 入門情報

| 資料名 | 資料番号 | PDF ファイル名 |
|---|----------------------|-----------|
| 「IBM DB2 Universal Database DB2 クライアント機能 概説およびインストール」 | GC88-9144 (ハードコピーなし) | db2itj81 |
| 「IBM DB2 Universal Database DB2 サーバー機能 概説およびインストール」 | GC88-9148 | db2isj81 |
| 「IBM DB2 Universal Database DB2 Personal Edition 概説およびインストール」 | GC88-9150 | db2i1j81 |
| 「IBM DB2 Universal Database インストールおよび構成 補足」 | GC88-9149 (ハードコピーなし) | db2iyj81 |
| 「IBM DB2 Universal Database DB2 Data Links Manager 概説およびインストール」 | GC88-9141 | db2z6j81 |

チュートリアル情報

チュートリアル情報は、DB2 機能を紹介し、さまざまなタスクを実行する方法を示します。

表 16. チュートリアル情報

| 資料名 | 資料番号 | PDF ファイル名 |
|---|--------|-----------|
| 「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介」 | 資料番号なし | db2tuj81 |
| 「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド」 | 資料番号なし | db2taj81 |
| 「インフォメーション・カタログ・センター チュートリアル」 | 資料番号なし | db2aij81 |
| 「Video Central for e-business チュートリアル」 | 資料番号なし | db2twj81 |
| 「Visual Explain チュートリアル」 | 資料番号なし | db2tvj81 |

オプション・コンポーネント情報

このカテゴリーの情報は、DB2 のオプション・コンポーネントを使用する方法について説明しています。

表 17. オptional・コンポーネント情報

| 資料名 | 資料番号 | PDF ファイル名 |
|---|-----------|-----------|
| 「IBM DB2 Cube Views Guide and Reference」 | SC18-7298 | db2aax81 |
| 「IBM DB2 Query Patroller インストール、管理、使用法のガイド」 | GC88-9154 | db2dwj81 |
| 「IBM DB2 Spatial Extender and Geodetic Extender ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス」 | SC88-9171 | db2sbj81 |
| 「IBM DB2 Universal Database Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス」 | SC88-9169 | db2z0x82 |
| 「DB2 Net Search Extender 管理およびユーザーズ・ガイド」 | SH88-8546 | N/A |

注: この資料の HTML 版は、HTML ドキュメンテーション CD からインストールされません。

リリース・ノート

リリース・ノートは、ご使用の製品のリリースおよびフィックスパック・レベルに特有の追加情報を紹介します。また、リリース・ノートには、各リリース、アップデート、およびフィックスパックで組み込まれた資料上の更新の要約も含まれています。

表 18. リリース・ノート

| 資料名 | 資料番号 | PDF ファイル名 |
|----------------|--------------------|-----------|
| 「DB2 リリース・ノート」 | 「注」を参照。 | 「注」を参照。 |
| 「DB2 インストール情報」 | 製品 CD-ROM でのみ参照可能。 | 使用できません。 |

注: リリース・ノートは以下の形式で入手できます。

- XHTML およびテキスト形式 (製品 CD 内)
- PDF 形式 (PDF ドキュメンテーション CD 内)

さらに、リリース・ノートの中で、『既知の問題と予備手段』および『リリース間の非互換性』に関する部分は DB2 インフォメーション・センターにも表示されます。

UNIX ベースのプラットフォームでテキスト形式でリリース・ノートを確認するには、Release.Notes ファイルを参照してください。このファイルは、DB2DIR/Readme/%L ディレクトリーに収録されています。%L はロケール名を表しています。DB2DIR は以下になります。

- AIX オペレーティング・システムの場合: /usr/opt/db2_08_01
- その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合: /opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 79 ページの『DB2 資料とヘルプ』

関連タスク:

- 99 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』
- 100 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』
- 101 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』

PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法

DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている DB2 資料を印刷することができます。 Adobe Acrobat Reader を使用すれば、資料全体または特定のページを印刷できます。

前提条件:

Adobe Acrobat Reader がインストールされていることを確認してください。 Adobe Acrobat Reader をインストールする必要がある場合、 Adobe Web サイト (www.adobe.com) から入手できます。

手順:

PDF ファイルから DB2 資料を印刷するには以下のようにします。

1. *DB2 PDF* ドキュメンテーション CD をドライブに挿入します。 UNIX オペレーティング・システムの場合、 *DB2 PDF* ドキュメンテーション CD をマウントします。 UNIX オペレーティング・システムで CD をマウントする方法については、「概説およびインストール」を参照してください。
2. `index.htm` を開きます。ブラウザ・ウィンドウにファイルが開きます。
3. 参照したい PDF のタイトルをクリックします。 Acrobat Reader で PDF が開きます。
4. 「ファイル」→「印刷」を選択して、所要の資料の任意の部分を印刷します。

関連概念:

- 80 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (AIX)』
- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『HP-UX 上での CD-ROM のマウント』
- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 100 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Solaris)』

関連資料:

- 93 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 の印刷資料の注文方法

ハードコピー版の資料を望む場合には、以下のいずれかの方法で注文できます。

印刷資料の注文方法:

一部の国または地域では、印刷された資料を注文することもできます。お客様がお住まいの国または地域でこのサービスが利用可能かどうかを確認するには、お住まいの国または地域の IBM Publications Web サイトをご覧ください。資料のご注文が可能な場合、以下のようにすることができます。

- 正規の IBM 製品販売業者または営業担当員に連絡してください。お客様がお住まいの地域の IBM 担当員の情報については、お手数ですが IBM の Web サイト (www.ibm.com/planetwide) の IBM Worldwide Directory of Contacts で確認してください。
- IBM Publications Center (<http://www.ibm.com/shop/publications/order>) にアクセスしてください。なお、IBM Publications Center から資料を注文できない国もあります。

DB2 製品がご利用可能になった時点で、印刷された資料は DB2 PDF ドキュメンテーション CD にある PDF 形式の資料と同じものです。さらに、DB2 インフォメーション・センター CD に収録されている印刷された資料の内容もまた、これらと同じです。ただし、DB2 インフォメーション・センター CD には、PDF 資料にない追加情報も含まれます (たとえば、SQL 管理作業や HTML サンプル)。DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている資料の中には、ハードコピーとしてご注文できない資料もあります。

注: DB2 インフォメーション・センターは、PDF またはハードコピーの資料よりも頻繁に更新されます。ドキュメンテーションの更新が入手可能になった時点でインストールするか、DB2 インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) を参照して最新の情報を入手してください。

関連タスク:

- 99 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』

関連資料:

- 93 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す

コンテキスト・ヘルプは、特定のウィンドウ、ノートブック、ウィザード、またはアドバイザに関連したタスクまたはコントロールの情報を提供します。コンテキスト・ヘルプは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースのある DB2 管理ツールおよび開発ツールから利用できます。コンテキスト・ヘルプには、以下の 2 種類があります。

- それぞれのウィンドウまたはノートブックにある「ヘルプ」ボタンからアクセス可能なヘルプ
- infopop (ポップアップ情報ウィンドウ)。これは、マウス・カーソルを特定のフィールドまたはコントロール上に置いたとき、またはウィンドウ、ノートブック、ウィザード、アドバイザ内でフィールドまたはコントロールを選択して F1 を押すと表示されます。

「ヘルプ」ボタンを押すと、概説、前提条件、およびタスク情報が表示されます。infopop は、それぞれのフィールドおよびコントロールについて説明します。

手順:

コンテキスト・ヘルプを呼び出すには、以下のようになります。

- ウィンドウおよびノートブックのヘルプを表示するには、いずれかの DB2 ツールを開始して、任意のウィンドウまたはノートブックを開きます。ウィンドウまたはノートブックの右下隅にある「ヘルプ」ボタンをクリックして、コンテキスト・ヘルプを呼び出します。

また、それぞれの DB2 ツール・センターの上部にある「ヘルプ」メニュー項目からコンテキスト・ヘルプにアクセスすることもできます。

ウィザードおよびアドバイザでは、最初のページの「タスクの概要」リンクをクリックすると、コンテキスト・ヘルプを表示できます。

- ウィンドウまたはノートブック上の各コントロールの infopop ヘルプを表示するには、コントロールをクリックしてから、**F1** を押します。コントロールの詳細情報を示すポップアップ情報が、黄色いウィンドウに表示されます。

注: フィールドまたはコントロールにマウス・カーソルを置いておくだけで infopops が表示されるようにするには、「ツール設定」ノートブックの「**文書 (Documentation)**」ページの「**infopops の自動表示**」チェック・ボックスを選択します。

infopop に似た別のコンテキスト・ヘルプに、診断ポップアップ情報があります。これにはデータ入力規則が示されます。診断ポップアップ情報は、無効または不十分なデータが入力されたとき、紫色のウィンドウに表示されます。診断ポップアップ情報は、以下に関して表示されます。

- 必須フィールド。
- 日付フィールドのように、正確なフォーマットを必要とするデータのフィールド。

関連タスク:

- 90 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 102 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』

- 102 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 103 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセス: Concepts help』
- 『DB2 UDB ヘルプの使用方法: Common GUI help』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセスのロケーションの設定: Common GUI help』
- 『DB2 コンテキスト・ヘルプと資料へのアクセスを設定する: Common GUI help』

コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す

メッセージ・ヘルプは、メッセージが出された原因と、エラーへの応答として実行すべきアクションを説明します。

手順:

メッセージ・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? XXXnnnnn
```

ここで、*XXXnnnnn* は有効なメッセージ ID を表します。

たとえば、? SQL30081 と入力すると、メッセージ SQL30081 に関するヘルプを表示します。

関連概念:

- 「メッセージ・リファレンス 第 1 巻」の『メッセージの概要』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す

コマンド・ヘルプは、コマンド行プロセッサでのコマンドの構文を説明します。

手順:

コマンド・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? command
```

ここで *command* はキーワードまたはコマンド全体を表します。

たとえば、? catalog と入力すると、すべての CATALOG コマンドに関するヘルプが表示され、? catalog database と入力すると、CATALOG DATABASE コマンドのヘルプだけが表示されます。

関連タスク:

- 101 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 90 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 102 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 103 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す

DB2 Universal Database は、SQL ステートメントの結果の原因となったと考えられる条件の SQLSTATE 値を戻します。SQLSTATE ヘルプは、SQL 状態および SQL 状態クラス・コードの意味を説明します。

手順:

SQL 状態ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? sqlstate または ? class code
```

ここで、*sqlstate* は有効な 5 桁の SQL 状態を、*class code* は SQL 状態の最初の 2 桁を表します。

たとえば、? 08003 を指定すると SQL 状態 08003 のヘルプが表示され、? 08 を指定するとクラス・コード 08 のヘルプが表示されます。

関連タスク:

- 90 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 102 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 102 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』

DB2 チュートリアル

DB2® チュートリアルは、DB2 Universal Database のさまざまな機能について学習するのを支援します。このチュートリアルでは、アプリケーションの開発、SQL 照会のパフォーマンス調整、データウェアハウスの処理、メタデータの管理、および DB2 を使用した Web サービスの開発の各分野で、段階的なレッスンが用意されています。

はじめに:

インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) から、このチュートリアルの XHTML 版を表示できます。

チュートリアルの中で、サンプル・データまたはサンプル・コードを使用する場合があります。個々のタスクの前提条件については、それぞれのチュートリアルを参照してください。

DB2 Universal Database チュートリアル:

以下に示すチュートリアルのタイトルをクリックすると、そのチュートリアルを表示できます。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介
データウェアハウス・センターを使用して簡単なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド
データウェアハウス・センターを使用して高度なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

インフォメーション・カタログ・センター・チュートリアル
インフォメーション・カタログを作成および管理して、インフォメーション・カタログ・センターを使用してメタデータを配置し使用します。

Visual Explain チュートリアル
Visual Explain を使用して、パフォーマンスを向上させるために SQL ステートメントを分析し、最適化し、調整します。

DB2 トラブルシューティング情報

DB2[®] 製品を使用する際に役立つ、トラブルシューティングおよび問題判別に関する広範囲な情報を利用できます。

DB2 ドキュメンテーション

トラブルシューティング情報は、DB2 インフォメーション・センター、および DB2 ライブラリーに含まれる PDF 資料の中にご利用いただけます。DB2 インフォメーション・センターで、(ブラウザ・ウィンドウの左側の) ナビゲーション・ツリーの「サポートおよびトラブルシューティング (Support and troubleshooting)」ブランチを参照すると、DB2 トラブルシューティング・ドキュメンテーションの詳細なリストが見つかります。

DB2 Technical Support の Web サイト

現在問題が発生していて、考えられる原因とソリューションを検索したい場合は、DB2 Technical Support の Web サイトを参照してください。Technical Support サイトには、最新の DB2 出版物、TechNotes、プログラム診断依頼書 (APAR)、フィックスパック、DB2 内部エラー・コードの最新リスト、その他のリソースが用意されています。この知識ベースを活用して、問題に対する有効なソリューションを探し出すことができます。

DB2 Technical Support の Web サイト

(<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support>) にアクセスしてください。

DB2 Problem Determination Tutorial Series

DB2 製品で作業中に直面するかもしれない問題を素早く識別し、解決する方法に関する情報を見つけるには、DB2 Problem Determination Tutorial Series の Web サイトを参照してください。あるチュートリアルでは、使用可能な DB2 問題判別機能およびツールを紹介し、それらをいつ使用すべきかを判断する助けを与えます。別のチュートリアルは、『データベース・エ

ンジン問題判別 (Database Engine Problem Determination)』、『パフォーマンス問題判別 (Performance Problem Determination)』、『アプリケーション問題判別 (Application Problem Determination)』などの関連トピックを扱っています。

DB2 Technical Support

(<http://www.ibm.com/software/data/support/pdm/db2tutorials.html>) には、DB2 問題判別チュートリアルがすべて揃っています。

関連概念:

- 80 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 「問題判別の手引き」の『Introduction to Problem Determination - DB2 テクニカル・サポートのチュートリアル』

アクセス支援

アクセス支援機能は、身体に障害のある (身体動作が制限されている、視力が弱いなど) ユーザーがソフトウェア製品を十分活用できるように支援します。DB2[®] バージョン 8 製品に備わっている主なアクセス支援機能は、以下のとおりです。

- すべての DB2 機能は、マウスの代わりにキーボードを使ってナビゲーションできます。詳細については、『キーボードによる入力およびナビゲーション』を参照してください。
- DB2 ユーザー・インターフェースのフォント・サイズおよび色をカスタマイズすることができます。詳細については、106 ページの『アクセスしやすい表示』を参照してください。
- DB2 製品は、Java™ Accessibility API を使用するアクセス支援アプリケーションをサポートします。詳細については、106 ページの『支援テクノロジーとの互換性』を参照してください。
- DB2 資料は、アクセスしやすい形式で提供されています。詳細については、106 ページの『アクセスしやすい資料』を参照してください。

キーボードによる入力およびナビゲーション

キーボード入力

キーボードだけを使用して DB2 ツールを操作できます。マウスを使って実行できる操作は、キーまたはキーの組み合わせによっても実行できます。標準のオペレーティング・システム・キー・ストロークを使用して、標準のオペレーティング・システム操作を実行できます。

キーまたはキーの組み合わせによって操作を実行する方法について、詳しくは キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・ナビゲーション

キーまたはキーの組み合わせを使用して、DB2 ツールのユーザー・インターフェースをナビゲートできます。

キーまたはキーの組み合わせによって DB2 ツールをナビゲートする方法の詳細については、キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・フォーカス

UNIX® オペレーティング・システムでは、アクティブ・ウィンドウの中で、キー・ストロークによって操作できる領域が強調表示されます。

アクセスしやすい表示

DB2 ツールには、視力の弱いユーザー、その他の視力障害をもつユーザーのためにアクセシビリティを向上させる機能が備わっています。これらのアクセシビリティ拡張機能には、フォント・プロパティのカスタマイズを可能にする機能も含まれています。

フォントの設定

「ツール設定」ノートブックを使用して、メニューおよびダイアログ・ウィンドウに使用されるテキストの色、サイズ、およびフォントを選択できます。

フォント設定に関する詳細情報は、メニューおよびテキストのフォントを変更する: Common GUI help を参照してください。

色に依存しない

本製品のすべての機能を使用するために、ユーザーは必ずしも色を識別する必要はありません。

支援テクノロジーとの互換性

DB2 ツールのインターフェースは、Java Accessibility API をサポートします。これによって、スクリーン・リーダーその他の支援テクノロジーを DB2 製品で利用できるようになります。

アクセスしやすい資料

DB2 形式は、ほとんどの Web ブラウザーで表示可能な XHTML 1.0 形式で提供されています。XHTML により、ご使用のブラウザーに設定されている表示設定に従って資料を表示できます。さらに、スクリーン・リーダーや他の支援テクノロジーを使用することもできます。

シンタックス・ダイアグラムはドット 10 進形式で提供されます。この形式は、スクリーン・リーダーを使用してオンライン・ドキュメンテーションにアクセスする場合にのみ使用できます。

関連概念:

- 106 ページの『ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム』

ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム

スクリーン・リーダーを使用してインフォメーション・センターを利用するユーザーのために、シンタックス・ダイアグラムがドット 10 進形式で提供されます。

ドット 10 進形式では、各シンタックス・エレメントは別々の行に書き込まれます。複数のシンタックス・エレメントが常に同時に存在する (または常に同時に不在の) 場合、単一のコンパウンド・シンタックス・エレメントとみなせるので同一行に表示できます。

各行は、ドット 10 進数で開始します。たとえば、3 または 3.1 ないしは 3.1.1 です。こうした数を適切に聞き取るには、スクリーン・リーダーが句読点を読み取るように設定されていることを確認してください。同じドット 10 進数を持つすべてのシンタックス・エレメント (たとえば、3.1 という数値を持つすべてのシンタックス・エレメント) は、相互に排他的な代替エレメントです。3.1 USERID および 3.1 SYSTEMID という行を聞き取る場合、シンタックスには両方ではなく USERID または SYSTEMID のどちらかが含まれることが分かります。

ドット 10 進レベルは、ネストのレベルを表示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメントの後に、一連のドット 10 進数 3.1 のシンタックス・エレメントが続きます。3.1 の番号が付されたシンタックス・エレメントすべては、番号 3 の付されたシンタックス・エレメントに従属します。

シンタックス・エレメントに関する情報を追加するため、ドット 10 進数の次に特定のワードおよびシンボルが使用されます。時折、こうしたワードおよびシンボルはエレメントの最初に表示される場合もあります。簡単に識別するため、ワードやシンボルがシンタックス・エレメントの一部である場合には、円記号 (¥) 文字が先頭に付きます。* シンボルはドット 10 進数の次に使用でき、シンタックス・エレメントが反復することを示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメント *FILE は、3 ¥* FILE という形式になります。3* FILE という形式は、シンタックス・エレメント FILE が反復されることを示します。3* ¥* FILE という形式は、シンタックス・エレメント * FILE が反復されることを示します。

シンタックス・エレメントのストリングを分離するのに使用されるコンマなどの文字は、シンタックス内の分離する項目の直前に表示されます。こうした文字は、それぞれの項目と同一行に表示するか、同じドット 10 進数を持つ関連する項目のある別の行に表示できます。またその行には、シンタックス・エレメントに関する情報を提供する別のシンボルを表示することも可能です。たとえば、複数の LASTRUN および DELETE シンタックス・エレメントを使用している場合には、5.1*、5.1 LASTRUN、および 5.1 DELETE という行は、エレメントをコンマで区切る必要があります。区切り文字が指定されないと、各シンタックス・エレメントを区切るのにブランクが使用されると想定されます。

シンタックス・エレメントの前に % シンボルが付く場合、他の箇所で定義されている参照であることを示します。% シンボルの後のストリングは、リテラルではなくシンタックス・フラグメントの名前です。たとえば、2.1 %OP1 という行は別のシンタックス・フラグメント OP1 を参照すべきことを意味します。

以下のワードおよびシンボルが、ドット 10 進数の次に使用されます。

- ? は、オプションのシンタックス・エレメントであることを表します。? シンボルが後に続くドット 10 進数は、対応するドット 10 進数のシンタックス・エレメント、および任意の従属のシンタックス・エレメントがオプションであることを示します。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが 1 つしかない場合、? シンボルはそのシンタックス・エレメントと同じ行に表示されます (たとえば、5? NOTIFY)。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが複数

ある場合、 ? シンボルだけで行に表示され、その後にオプションのシンタックス・エレメントが続きます。たとえば、「5 ?, 5 NOTIFY、および 5 UPDATE」という行を聞き取る場合、シンタックス・エレメント NOTIFY および UPDATE がオプションである、つまりそのいずれかを選択でき、どちらも選択しないこともできることが分かります。 ? シンボルは、線路型ダイアグラムのバイパス線に相当します。

- ! は、デフォルトのシンタックス・エレメントであることを表します。! シンボルおよびシンタックス・エレメントが後に続くドット 10 進数は、そのシンタックス・エレメントが、同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントすべてのデフォルト・オプションであることを示します。同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントのうち 1 つだけに、! シンボルを指定できます。たとえば、「2? FILE、2.1! (KEEP)、および 2.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、FILE キーワードのデフォルト・オプションは (KEEP) になります。この例では、FILE キーワードを含めてもオプションを指定しない場合には、デフォルト・オプション KEEP が適用されます。デフォルト・オプションは、次に高位のドット 10 進数にも適用されます。この例の場合、FILE キーワードが省略されると、デフォルトの FILE(KEEP) が使用されます。しかし、「2? FILE、2.1、2.1.1! (KEEP)、および 2.1.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、デフォルト・オプション KEEP は次に高位のドット 10 進数 2.1 (関連キーワードを持っていない) にのみ適用され、2? FILE には適用されません。キーワード FILE が省略されると、どれも使用されません。
- * は、0 回以上反復できるシンタックス・エレメントを示します。* シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントが 0 回以上使用できること、つまりオプションであり、なおかつ反復できることを表します。たとえば、5.1* データ域という行を聞き取る場合、1 つまたは複数のデータ域を含めるか、またはデータ域を全く含めないことが可能です。「3*, 3 HOST、および 3 STATE」という行を聞き取る場合、HOST、STATE をどちらか一方または両方同時に含めるか、どちらも含めないことができます。

注:

1. ドット 10 進数の後にアスタリスク (*) が付き、ドット 10 進数の付いた項目が 1 つしかない場合には、同じ項目を複数回反復できます。
 2. ドット 10 進数の後にアスタリスクが付き、ドット 10 進数の付いた項目が複数ある場合、リストから複数の項目を使用できますが、各項目を複数回使用することはできません。前述の例では、HOST STATE と書くことはできませんが、HOST HOST とは書けません。
 3. * シンボルは、線路型シンタックス・ダイアグラムのループバック線に相当します。
- + は、1 回以上含める必要のあるシンタックス・エレメントであることを示します。+ シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントを 1 回以上含める必要があること、つまり少なくとも 1 回は含める必要があり、反復できることを表します。たとえば、「6.1+ データ域」という行を聞き取る場合、データ域を少なくとも 1 回は含めなければなりません。「2+, 2 HOST、および 2 STATE」という行を聞き取る場合には、HOST、STATE、またはその両方を含める必要があります。* シンボルと同様に、+ シンボルは、ドット 10 進

| 数の付いた項目が 1 つしかない場合に限り、その特定の項目のみを反復できま
| す。 * シンボルと同様、 + シンボルは線路型シンタックス・ダイアグラムのル
| ープバック線に相当します。

| **関連概念:**

- | • 105 ページの『アクセス支援』

| **関連タスク:**

- | • 『キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help』

| **関連資料:**

- | • 「SQL リファレンス 第 2 巻」の『構文図の見方』

| **DB2 Universal Database 製品の共通基準認証**

| DB2 Universal Database は、 Common Criteria の評価検定レベル 4 (EAL4) で認証
| の評価を受けています。 Common Criteria の詳細については、以下の Common
| Criteria の Web サイトを参照してください。 <http://niap.nist.gov/cc-scheme/>

付録 B. DB2 クライアントのマージ・モジュール

Windows インストーラー・マージ・モジュールを使用すると、Windows インストーラーを使用する製品に DB2 クライアント機能を簡単に追加できます。

マージ・モジュールのテクノロジーについて詳しくは、インストール・オーサリング製品に付属の資料か、<http://www.microsoft.com/japan/msdn/> を参照してください。

DB2 クライアントのマージ・モジュールが組み込まれているアプリケーションをインストールした場合は、その他の DB2 アプリケーションをインストールする前にそのアプリケーションを除去しなければなりません。同様に、別の DB2 製品がすでにインストールされている場合は、当該アプリケーションをインストールする前にこの製品を除去しなければなりません。

次のマージ・モジュールを利用できます。

DB2 Base Client Merge Module.msm

このモジュールには、データベース接続、SQL、および DB2 コマンド機能に必要な機能が備えられています。

DB2 Bind Files Merge Module.msm

このモジュールには、DB2 でデータベースの作成やリモート・ホスト・データベースのアクセスなどのタスクに使用されるシステム・バインド・ファイルが含まれています。

DB2 Client Administration Tools Merge Module.msm

このモジュールには、ローカルとリモートのデータベースの管理に使用するさまざまな DB2 グラフィック・ツールとコマンド行ツールが備えられています。

DB2 JDBC and SQLJ Support.msm

このモジュールには、JDBC ドライバーを使って Java サンプルをビルドして実行できる JDBC および SQLJ サポートが含まれています。

DB2 LDAP Exploitation Merge Module.msm

このモジュールを使用すると、DB2 で LDAP ディレクトリーを使用して、データベース・ディレクトリーと構成情報を保管できます。

DB2 Named Pipes Support Merge Module.msm

このモジュールを使用すると、名前付きパイプ通信プロトコルを使用して、クライアント/サーバー環境でデータを転送できます。

DB2 ODBC Support Merge Module.msm

このモジュールには、Open Database Connectivity (ODBC) を使用してデータにアクセスするアプリケーションのサポートが備えられています。

DB2 OLE DB Support Merge Module.msm

このモジュールには、アプリケーションがさまざまなデータ・ソースに保管されているデータに均等にアクセスできるようにするインターフェースの集合が備えられています。

DB2 Merge Module Configurator.msm

この構成可能モジュールを使用すると、インストール内容中で DB2 を構成するのに使用できる応答ファイルを作成できます。構成可能オプションにより、DB2 の構成に使用する応答ファイルの場所を指定できます。構成のタイプには、インスタンスの作成、データベース・マネージャー構成パラメーターまたは DB2 プロファイル・レジストリー変数の設定が含まれます。

さまざまなカスタム・アクションの順序と、提案されている順序に関する情報は、Orca などのツールを使用してマージ・モジュールを参照してください。

次のマージ・モジュールには、DB2 で使用される DB2 クライアント・メッセージが含まれています。製品の言語に応じて、該当するマージ・モジュール中のコンポーネントの組み込みやインストールを行ってください。

DB2 Client Messages - Arabic.msm
DB2 Client Messages - Bulgarian.msm
DB2 Client Messages - Chinese(Simplified).msm
DB2 Client Messages - Chinese(Traditional).msm
DB2 Client Messages - Croatian.msm
DB2 Client Messages - Czech.msm
DB2 Client Messages - Danish.msm
DB2 Client Messages - Dutch.msm
DB2 Client Messages - English.msm
DB2 Client Messages - Finnish.msm
DB2 Client Messages - French.msm
DB2 Client Messages - German.msm
DB2 Client Messages - Greek.msm
DB2 Client Messages - Hebrew.msm
DB2 Client Messages - Hungarian.msm
DB2 Client Messages - Italian.msm
DB2 Client Messages - Japanese.msm
DB2 Client Messages - Korean.msm
DB2 Client Messages - Norwegian.msm
DB2 Client Messages - Polish.msm
DB2 Client Messages - Portuguese(Brazilian).msm
DB2 Client Messages - Portuguese(Standard).msm
DB2 Client Messages - Romanian.msm
DB2 Client Messages - Russian.msm
DB2 Client Messages - Slovak.msm
DB2 Client Messages - Slovenian.msm
DB2 Client Messages - Spanish.msm
DB2 Client Messages - Swedish.msm

関連概念:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによるインストールの基礎』
- 4 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- | • 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』
- | • 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)』
- | • 23 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』

付録 C. DB2 Run-Time Client Lite のコマンド行オプション

次のリストは、DB2 Run-Time Client Lite のインストールで使用できるコマンド行オプションのサブセットです。

/w このオプションは、`setup.exe` が、インストールの完了まで待機してから終了することを強制実行します。バッチ・ファイル・インストールの場合は、`setup.exe` コマンドの前に `/WAIT` を挿入することもできます。たとえば、以下のようにします。

```
start /WAIT setup.exe /w
```

/*v[log file name]

このオプションを使用すると、インストールのログを作成できます。このログを使用して、インストール時に発生する可能性のある問題のトラブルシューティングを行えます。

/v このオプションを使用すると、追加のコマンド行オプションと共通プロパティを Windows Installer に渡すことができます。サイレント・インストールを実行するには、このオプションを指定しなければなりません。使用可能な Windows Installer オプションについて詳しくは、<http://www.microsoft.com/japan/msdn/> を参照してください。

/qn このオプションを使用すると、サイレント・インストールを実行できます。

/L このオプションを使用すると、セットアップ言語を指定できます。例えば、セットアップ言語としてフランス語を指定するには、**setup.exe /L1036** コマンドを入力してください。

表 19. 言語 ID

| 言語 | ID |
|-----------------|------|
| アラビア語 (サウジアラビア) | 1025 |
| ブルガリア語 | 1026 |
| 中国語 (簡体字) | 2052 |
| 中国語 (繁体字) | 1028 |
| クロアチア語 | 1050 |
| チェコ語 | 1029 |
| デンマーク語 | 1030 |
| オランダ語 (標準) | 1043 |
| 英語 | 1033 |
| フィンランド語 | 1035 |
| フランス語 (標準) | 1036 |
| ドイツ語 | 1031 |
| ギリシャ語 | 1032 |
| ヘブライ語 | 1037 |
| ハンガリー語 | 1038 |
| イタリア語 (標準) | 1040 |

表 19. 言語 ID (続き)

| 言語 | ID |
|-----------------|------|
| 日本語 | 1041 |
| 韓国語 | 1042 |
| ノルウェー語 (ブークモール) | 1044 |
| ポーランド語 | 1045 |
| ポルトガル語 (ブラジル) | 1046 |
| ポルトガル語 (標準) | 2070 |
| ルーマニア語 | 1048 |
| ロシア語 | 1049 |
| スロバキア語 | 1051 |
| スロベニア語 | 1060 |
| スペイン語 (従来種) | 1034 |
| スウェーデン語 | 1053 |
| トルコ語 | 1055 |

以下に、DB2 Run-Time Client Lite のインストールを制御するために指定できる共通プロパティを示します。

- これらのパラメーターは、コマンド行中の最後のパラメーターでなければなりません。
- RSP_FILE_PATH - このパラメーターには、Run-Time Client のインストールの制御に使用する応答ファイルへの絶対パスが含まれている必要があります。このパラメーターは、/qn の指定時のみ有効です。

応答ファイルのインストールを実行するには、次のコマンド行パラメーターを使用する必要があります。

```
setup /v"/qn RSP_FILE_PATH=[Full Path to the Response File]"
```

関連概念:

- 4 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 23 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』

付録 D. 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム(本プログラムを含む)との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

| | |
|---|------------------|
| ACF/VTAM | iSeries |
| AISPO | LAN Distance |
| AIX | MVS |
| AIXwindows | MVS/ESA |
| AnyNet | MVS/XA |
| APPN | Net.Data |
| AS/400 | NetView |
| BookManager | OS/390 |
| C Set++ | OS/400 |
| C/370 | PowerPC |
| CICS | pSeries |
| Database 2 | QBIC |
| DataHub | QMF |
| DataJoiner | RACF |
| DataPropagator | RISC System/6000 |
| DataRefresher | RS/6000 |
| DB2 | S/370 |
| DB2 Connect | SP |
| DB2 Extenders | SQL/400 |
| DB2 OLAP Server | SQL/DS |
| DB2 Information Integrator | System/370 |
| DB2 Query Patroller | System/390 |
| DB2 Universal Database | SystemView |
| Distributed Relational Database Architecture | Tivoli |
| DRDA | VisualAge |
| eServer | VM/ESA |
| Extended Services | VSE/ESA |
| FFST | VTAM |
| First Failure Support Technology | WebExplorer |
| IBM | WebSphere |
| IMS | WIN-OS/2 |
| IMS/ESA | z/OS |
| | zSeries |

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。
他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ
機能 105
ドット 10 進数の構文図 106
アクセス
DB2 UDB バージョン 7 サーバー 8
印刷
PDF ファイル 99
印刷ブックの注文 100
インストール
インフォメーション・センター 82, 84, 87
Java 開発キット 21
インフォメーション・センター
インストール 82, 84, 87
インポート機能
クライアント・プロファイルの構成 38
エクスポート機能
クライアント・プロファイルの作成 37
応答ファイル
作成
シン・クライアント 72
オンライン
オンライン・ヘルプへのアクセス 101

[カ行]

カーネル構成パラメーター
変更
HP-UX 14
Linux 16
Solaris オペレーティング環境 19
HP-UX 15
解決
サーバー・ホスト・アドレス 48
カタログ
データベース 54
パラメーター値ワークシート 56
名前付きパイプ 54
ホスト・データベース
DB2 Connect 54
NetBIOS ノード 51, 53

カタログ (続き)
TCP/IP ノード 51
キーボード・ショートカット
サポート 105
起動
コマンド・ヘルプ 102
メッセージ・ヘルプ 102
SQL ステートメント・ヘルプ 103
共用
インストール・ディレクトリー
シン・クライアント 64
クライアント
概要 3
サーバー接続 43
Administration Client 5
Application Development 6
Run-Time Client 5
Run-Time Lite 4
クライアントからサーバーへの通信
シナリオ 29
接続の構成
TCP/IP パラメーター値ワークシート 44
接続のテスト、CLP を使用した 57
クライアント構成
サポートされていない 6
サポートされている 6
クライアント/サーバー通信
接続の構成
サーバー・ホスト・アドレスの解決 48
クライアント・プロファイル
インポート機能 36
エクスポート機能 36
概要 36
構成、インポート機能の使用 38
作成、エクスポート機能の使用 37
コード・サーバー
シン・クライアント
ネットワーク・ドライブをマップする 73
プラットフォーム間のサポート 68
DB2 Administration Client のインストール 68
DB2 Connect Personal Edition のインストール 68
コード・ディレクトリー
シン・クライアント 71
更新
HTML 文書 91

構成
クライアント/サーバー接続
構成アシスタント (CA) 31
コマンド行プロセッサー (CLP) 43
TCP/IP ワークシート 44
TCP/IP
クライアント 47
構成アシスタント
ディスクバリー機能 35
構成アシスタント (CA)
クライアント・プロファイルの作成 37
構成
クライアント/サーバー接続 31
クライアント・プロファイル 38
データベース接続、一般 32
テスト
データベース接続 40
LDAP に関する考慮事項 40
コマンド
catalog database 54
catalog netbios 53
catalog npipe 54
catalog tcpip 51
db2setup 24
db2start 57
thnsetup 74
コマンド行オプション
Run-Time Client Lite のインストール 115
コマンド行プロセッサー (CLP)
クライアントでの NetBIOS の構成 49
クライアント/サーバー接続の構成 43
データベースのカタログ 54
ノードのカタログ 51
TCP/IP の構成
クライアント 47
コマンド・ヘルプ
起動 102

[サ行]

サーバー
クライアント接続 43
ホスト・アドレスの解決 48
サービス・ファイル
更新
クライアントでの 49
サポートされている構成
クライアント 6

資料

表示 90

身体障害 105

シン・クライアント

インストール 67

インストール・ディレクトリーの共
用 64

Windows に関する考慮事項 64

応答ファイル 72

概要 61

コード・サーバー

ネットワーク・ドライブをマップす
る 73

コード・ディレクトリー 71

考慮事項 61

使用可能にする 74

セットアップ

プラットフォーム間のサポート 68

セットアップ例 61

制限

バージョン 8

SNA 9

接続

プロファイルを使用したデータベース
への接続 34

接続のテスト

クライアントとサーバーの間 57

前提条件

DB2 クライアント

ホスト・データベース接続 22

[タ行]

チュートリアル 103

トラブルシューティングと問題判別
104

追加

データベース

手動での 32

通信

通信のシナリオ、クライアントからサ
ーバーへの 29

データベース

カタログ 54

構成 40

データベース接続

構成

構成アシスタント (CA) の使用
32

ディスクバリーの使用 35

プロファイルの使用 34

テスト 40

データベースの手動追加、構成アシスタ
ント (CA) 32

データベース・マネージャー構成
更新

NetBIOS 51

ディスクバリー機能

データベース接続の構成 35

ディスク要件

UNIX 11

Windows 11

テスト

データベース接続 40

ドット 10 進数の構文図 106

トラブルシューティング

オンライン情報 104

チュートリアル 104

[ナ行]

名前付きパイプ

パラメーター値ワークシート 46

ネットワーク・ドライブをマップする

シン・クライアント 73

[ハ行]

バージョン 8 における制限

SNA サポート 9

パラメーター値ワークシート

データベースのカタログ 56

名前付きパイプ 46

NetBIOS 45

TCP/IP

クライアント/サーバー接続の構成
44

プラットフォーム間のサポート

セットアップ

シン・クライアント 68

プロファイル

構成

データベース接続 34

ヘルプ

コマンド

起動 102

表示 90, 92

メッセージ

起動 102

SQL ステートメント

起動 103

変更

カーネル・パラメーター

HP-UX 14

Linux 16

Solaris オペレーティング環境 19

ホスト・データベース

クライアント接続 22

[マ行]

マージ・モジュール

DB2 クライアント 111

メッセージ・ヘルプ

起動 102

メモリー要件

UNIX 11

Windows 11

問題判別

オンライン情報 104

チュートリアル 104

[ヤ行]

ユーザー・アカウント

DB2 クライアント 23

[ラ行]

例

リモート・データベースへの接続 57

論理アダプター番号

NetBIOS クライアント接続 50

A

Administration Client

オペレーティング・システム 5

概要 5

AIX

インストール

DB2 クライアント 11

Application Development Client

概要 6

D

DB2 Administration Client

インストール

コード・サーバーでの 68

シン・クライアント 61

DB2 Connect Personal Edition

インストール

コード・サーバーでの 68

シン・クライアント 61

DB2 Connect シン・クライアント

インストール 67

インストール・ディレクトリーの共
用 64

Windows に関する考慮事項 64

応答ファイル 72

コード・サーバー

ネットワーク・ドライブをマップす
る 73

DB2 Connect シン・クライアント (続き)
コード・ディレクトリー 71
考慮事項 61
セットアップ
プラットフォーム間のサポート 68
セットアップ例 61
DB2 インフォメーション・センター 80
起動 90
DB2 クライアント
インストール
UNIX 24
Windows 19, 23
インストール要件
AIX 11
HP-UX 13
Linux 16
Solaris オペレーティング環境 18
Windows 19
概要 3
カタログ
名前付きパイプ・ノード 54
NetBIOS ノード 53
TCP/IP ノード 51
サービス・ファイルの更新 49
接続
ホスト・データベース 22
マージ・モジュール 111
ユーザー・アカウント 23
DB2 チュートリアル 103
DB2 の資料
PDF ファイルの印刷 99
DB2 バージョン 8 クライアント
DB2 UDB バージョン 7 サーバーにア
クセスする 8
DB2 ブックの注文 100

H

HP-UX
インストール
DB2 クライアント 13
カーネル・パラメーターの変更 14
HP-UX カーネル構成パラメーター 15
HTML 文書
更新 91

J

Java 開発キット
インストール 21

L

LDAP (Lightweight Directory Access
Protocol)
ディレクトリー・サポートに関する考
慮事項 40
Lightweight Directory Access Protocol
(LDAP)
ディレクトリー・サポートに関する考
慮事項 40
Linux
インストール
DB2 クライアント 16
変更
カーネル・パラメーター 16

N

NetBIOS
更新
データベース・マネージャー構成フ
ァイル 51
構成
クライアント 50
CLP の使用 49
パラメーター値ワークシート 45
論理アダプター番号の判別 50

R

Run-Time Client
概要 5
Run-Time Client Lite
インストール
コマンド行オプション 115
概要 4

S

SNA サポート
バージョン 8 における制限 9
Solaris オペレーティング環境
インストール
DB2 クライアント 18
カーネル・パラメーターの変更 19
SQL ステートメント・ヘルプ
起動 103

T

TCP/IP
構成
クライアント 47, 49
thnsetup コマンド 74

U

UNIX
インストール
DB2 クライアント 24

W

Windows
インストール
DB2 クライアント 19, 23

IBM と連絡をとる

技術上の問題がある場合は、お客様サポートにご連絡ください。

製品情報

DB2 Universal Database 製品に関する情報は、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb> から入手できます。

このサイトには、技術ライブラリー、資料の注文方法、製品のダウンロード、ニュースグループ、フィックスパック、ニュース、および Web リソースへのリンクに関する最新情報が掲載されています。

米国以外の国で IBM に連絡する方法については、IBM Worldwide ページ (www.ibm.com/planetwide) にアクセスしてください。



Printed in Japan

GC88-9144-01



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12

Spine information:



IBM® DB2 Universal
Database

DB2 クライアント機能
概説およびインストール

バージョン 8.2